

日本方言研究会

第 119 回

研 究 発 表 会

発表原稿集

▼午前の部 10 時 00 分～11 時 50 分

- 1) 熊本市および周辺の方言における複合語のアクセント……………陳曦…1
- 2) 「多民族方言」の形成—首都圏在住南米人移民の日本語における変異と変化—
……………松本和子・奥村晶子・松田謙次郎…9

▼午後の部 13 時 30 分～17 時 10 分

- 3) 日本語諸方言における「麦粒腫」と「来訪神」の関連……………落合いずみ…17
- 4) 脱穀を意味する「おす」と「おし」
—東北・関東の自治体史誌等の記述から—……………榎本直樹…25
- 5) 方言（山中弁）と古典隨筆（枕草子）……………池上弥…33
- 6) 意志表現の選好の地域差—申し出表現に「手伝う？」が使われる理由—
……………船木礼子…41

付 錄

- 方言関係新刊書目 ………………49
お知らせ ………………奥付

令和 6 (2024) 年 11 月 2 日 (土) 10 時から

オンライン

日本方言研究会会則

昭和 62 年 5 月 22 日 制定
平成 30 年 6 月 16 日 改定

1. 本会は日本方言研究会 (Cercle dialectologique du Japon : Dialectological Circle of Japan) と称する。
2. 事務所は日本国内におく。その場所は別に定める。
3. 本会は、日本方言研究の促進と研究者相互の連絡を目的とする。
4. 本会の事業は、(1) 年 2 回の研究発表会の開催、(2) 機関誌の発行、(3) その他、とする。
5. 会員は、日本の方言研究に関心を持ち、本会の活動に積極的に参加するものとする。このうち、本会からの情報の提供を受ける個人・団体を連絡会員、機関誌を定期購読する個人・団体を購読会員とする。手続きは別に定める。
6. 役員としては、世話人 12 名をおく。人選は世話人会が行う。世話人の任期は 4 年とし、2 年ごとに半数を改選する。世話人の 2 期兼任は認めない。ただし 2 年後の再任は妨げない。
7. 本会の運営のために次の委員会をおく。委員会は世話人と世話人外の委員で構成される。

研究発表会委員会、編集委員会、総務委員会

研究発表会委員会は研究発表会に関する業務、編集委員会は機関誌に関する業務、総務委員会は他の委員会の管掌する業務以外のすべての業務を担当する。委員の任期は 4 年とし、同一の委員会における 2 期兼任は認めない。必要に応じ、委員会を臨時におくことができる。その構成と任期は別に定める。

8. 経費は、(1) 会費、(2) 寄付金その他、でまかなう。会費の額等は別に定める。
9. 会則の改定手続きは、その都度定める。

世話人 *新井小枝子・*大橋純一・*小川俊輔・*小西いずみ・佐々木冠・*澤村美幸・下地理則・*高木千恵・竹田晃子・津田智史・中西太郎・原田走一郎
(*は 2025 年 5 月まで、無印は 2027 年 5 月まで)

研究発表会委員 *大橋純一（委員長）・*高木千恵（副委員長）・佐々木冠・津田智史・*久保博雅・坂喜美佳・又吉里美・*三樹陽介
(*は 2025 年 5 月まで、無印は 2027 年 5 月まで)

熊本市および周辺の方言における複合語のアクセント

陳 曜¹

1 はじめに

日本語の複合語には、アクセント単位形成において、[ジ「コボ」ーエー]（自己防衛）（東京方言）のようにアクセントが1単位で発音されるものと、[「オ」ーザボ「一エー】（王座防衛）（東京方言）のように複数のアクセント単位で発音されるものがある。

上野（1996）は、アクセント単位形成には一定の地域差があり、青森市方言は複数単位の語を多くもつ方言である一方、宮崎県高鍋町方言は複数単位の語が少ない方言の代表である、と指摘している。また、「無アクセント方言」の複合語のアクセント単位形成について、郡（2022）は1957年に録音された宮崎県清武町の談話音調を分析対象とし、『百姓うどん』『リサイクルショップ』のように構成要素ごとに別の高さの動きがあることがあるために全体として2音調単位と見ることができるものがあった」「複合語の構成要素も音調単位になりうる」と指摘している。このように、「無アクセント方言」においては、東京方言では1単位になる複合語が2単位になる場合があることが指摘されているが、現在でもその傾向が見られるのか、不明である。

本研究は「無アクセント方言」とされる熊本市および周辺地域の方言を対象に、複合語のアクセントの実態を捉えることを目的とする。

2 方法

本研究では「無アクセント方言」とされる地域である熊本市および周辺地域の話者を対象に、複合語のアクセントに関する発音調査を行った。

2.1 調査に用いる調査語

調査語は表1に示す、複合語計84語である。調査語は2要素からなるものであり、全て東京方言では3モーラ+3モーラのものであった。そのうち、東京方言で中高型の1単位で発音されると思われるものは46語であり、中高型の1単位で発音されないと思われるものは38語である。なお、中高型の1単位で発音されないものの下位分類は窪菌（1995）、郡（2016）、陳（2017）に倣っている。

¹ ちん ぎ（早稲田大学） chenxi219@outlook.jp

表1 調査語リスト

東京方言では中高型の1単位で発音されるか	下位分類	調査語
東京方言では中高型の1単位で発音されるもの（46語）		遊び相手, 話し相手, 臓器移植, 外部委託, 業務委託, 大気汚染, 土壤汚染, 社会科学, 倫理基準, 壁画古墳, 化学作用, 外務次官, 財務次官, 勤務時間, 社会事業, 国語辞典, お国自慢, 地域社会, 援護射撃, 記念写真, 個人所得, 葉巻タバコ, 輸入タバコ, 離党届, テレビドラマ, ホームドラマ, 価格破壊, 化学肥料, 有機肥料, 基準歩合, 固定歩合, 相互扶助, 古典舞踊, 社会保険, 警備保障, 国家補償, 京都盆地, 時代祭り, 暑中見舞い, 脅し文句, 決まり文句, 殺し文句, たんす預金, 定期預金, 準備不足, 課題対応
東京方言では中高型の1単位で発音されないものの（38語）	並列	切磋琢磨, 前後左右, 上下左右, 自給自足, 不平不満, 不眠不休, 一夫多妻
	チーム名	ジュビロ磐田
	姓+地位	森田博士, 森田牧師, 森田顧問, 山田部長, 山田課長, 山田社長, 森田部長, 森田課長, 森田社長
	姓+名	森田みどり, 森田はるか, 森田太郎, 山田誠, 山田タケル, 山田守, 森田誠, 森田タケル, 森田守
	地域+地域を限定	インド各地, 神戸北部, 名古屋北部
	XとYが項関係で, Xがガ・ヲ格	自信過剰, 持続可能, 予約可能, 設備過剰, 理解不能, 意識不明, 兵器輸入, 名誉毀損, 控訴棄却

2.2 発音調査

調査協力者は表2に示す通り、熊本市および周辺地域の話者10名である。

表2 調査協力者の構成（太字は、本研究で特に注目する話者〔後述〕）

	性別	年齢（録音当時）	出身地	現住地
話者 1	女性	26	熊本市	同左
話者 2	女性	28	上益城郡山都町	同左
話者 3	女性	26	阿蘇郡産山村	南阿蘇村
話者 4	女性	23	熊本市北区	同左
話者 5	女性	72	阿蘇郡南阿蘇村	同左
話者 6	男性	26	阿蘇郡南阿蘇村	同左
話者 7	男性	68	熊本市南区（旧飽託郡）	同左
話者 8	女性	59	菊池市	熊本市南区（旧飽託郡）
話者 9	男性	43	宇土市	熊本市
話者 10	男性	27	熊本市北区	同左

調査語の読み上げの際は、キャリア文を使用した。キャリア文は、協力者一人ひとりに「調査語がテーマです」を自分の方言に直してもらったものを使用した。なお、調査語の位置は全て文頭であった。調査者ごとのキャリア文を表3に示す。

表3 調査協力者ごとの調査文

	キャリア文
話者 1	調査語がテーマになっとるんよね
話者 2	調査語がテーマつたいね
話者 3	調査語がテーマやけん
話者 4	調査語がテーマだけんね
話者 5	調査語の話題になりよる（ばい）
話者 6	調査語がテーマだけんね
話者 7	調査語がテーマんごたんね
話者 8	調査語が話題になっとってったい
話者 9	調査語がテーマになっとる
話者 10	調査語がテーマになっとる

調査語を調査協力者にランダムな順で提示し、1文につき1~2回発音してもらった。また、調査語の構成要素についてもそれぞれ単独で発音してもらった。

3 結果と考察

3.1 話者間の傾向の違い

調査語である 2 要素からなる複合語のアクセントについて、調査協力者 10 名中 6 名に東京方言に類似している傾向が観察された。一方、調査協力者 10 名中 4 名については、東京方言とは異なる傾向が観察された。

ここでいう東京方言に類似している傾向というのは、(1)のように、東京方言では後部要素に下がり目がある中高型の 1 単位で発音されるものが、協力者の発音においても同様に発音される傾向にある、ということである。話者 1・3・4・6・9・10 の 6 名が該当する。これらの話者は、熊本市および宇土市で生まれ育った 20-40 歳台の若・中年層の話者であると分類できる。話者 3 と話者 6 は、熊本市で大学時代を過ごしてから阿蘇郡に戻っており、熊本市での居住経験がある。

(1)

東京方言	中高型の 1 単位になる複合語 コ「クゴジ」テン	左記にならない複合語 「モリタカチヨー
話者 1	コ「クゴジ」テン	モ「リタカチヨー

東京方言とは異なる傾向が観察された 4 名は話者 2・5・7・8 (表 2 の太字) である。この 4 名については、ごく一部の語を除き、中高型の 1 単位のアクセントとなる例がほぼ観察されなかった。

これらの話者は、おおむね 60 歳台以上の高年層の話者であり、これらの話者による複合語のアクセントはこの地域の複合語アクセントの本来の姿であると考えられる。話者 2 は若年層であり、熊本市で大学時代を過ごしたが、大学卒業後に上益城郡に戻り、地元のシニアと日頃接触する仕事に従事しているためか、複合語アクセントについては他の若年層とは異なる傾向が見られた。

3.2 方言形が現れやすい話者のアクセントパターン

本節では、東京方言とは異なる傾向が観察された 4 名 (話者 2・5・7・8) のデータに注目し、筆者の聴覚印象および Praat でのピッチ曲線の目視により、複合語に現れるアクセントパターンを記述する。特に、前部要素 X と後部要素 Y のそれぞれの音調、および X と Y の境界における音調に注目する。なお、調査協力者によって調査文の発音回数は異なるが、今回分析の際は、1 回発音した話者 5 についてその 1 回を使用し、2 回発音した話者 2・7・8 について 2 回目を使用している。

分析の結果、今回の複合語のアクセントパターンは(2)の 4 種類にまとめられる。そのうち①～③は連続的なものである。

(2)

- ① X と Y 全体がほぼ 1 つの平坦音調（全体が東京方言の平板型のような形）のもの。例：神戸北部[「コーベホクブ」]
- ② X が上昇音調または平坦音調であり、X の末尾から Y の初頭にかけてピッチの下降が明瞭に感じられ、かつ Y にも上昇音調があるもの。
例：森田はるか[モリ「タ「ハル「カ」], 價格破壊[カ「カク「ハ「カイ」]
- ③ X が上昇音調または平坦音調であり、Y が X より一段と低い平坦音調であるもの。例：大気汚染[「タイキ「オセン」]
- ④ X に下降があり、Y が X に比べ一段と低く平坦音調であるもの。
例：森田顧問[「モ「リタコモン」]

アクセントパターン①～④の例のピッチ曲線を図 1～4 に示す。

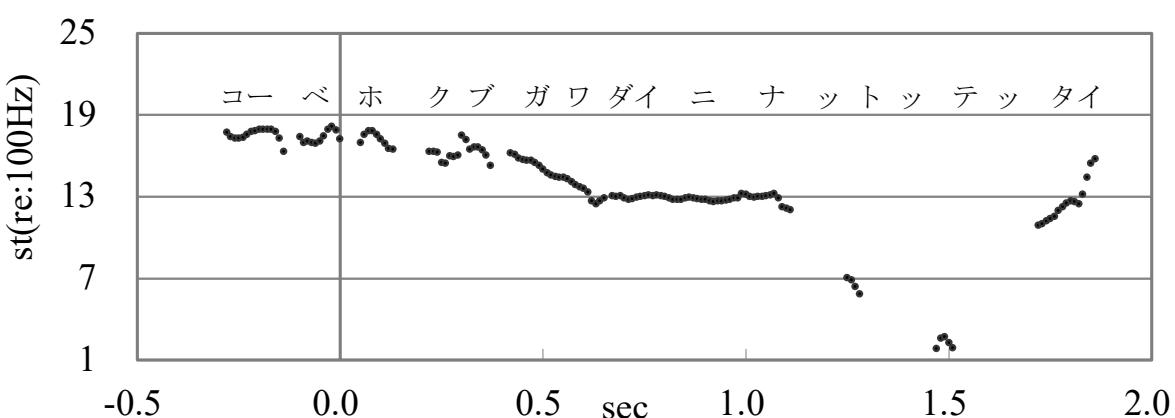


図 1 パターン①話者 8 の「神戸北部が話題になつとつてつた」のピッチ曲線

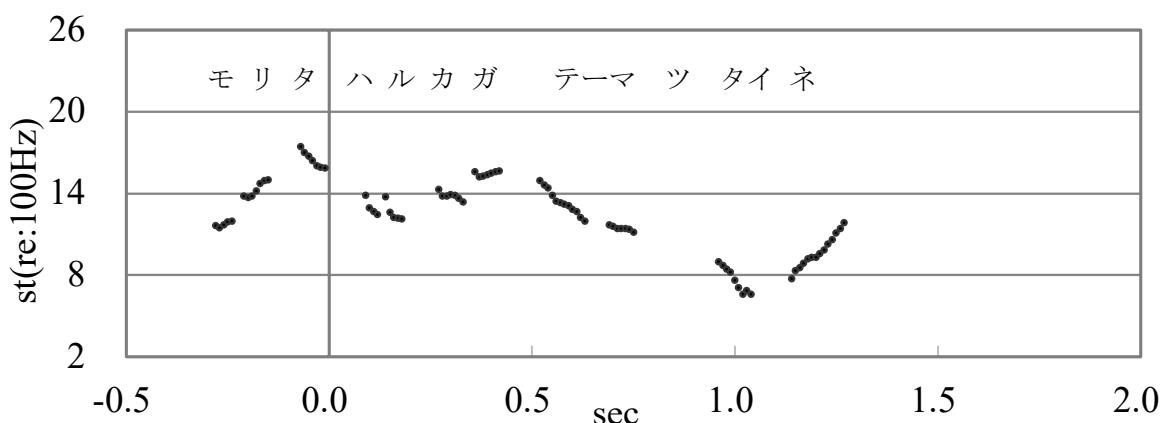


図 2 パターン②話者 2 の「森田はるかがテーマつた」のピッチ曲線

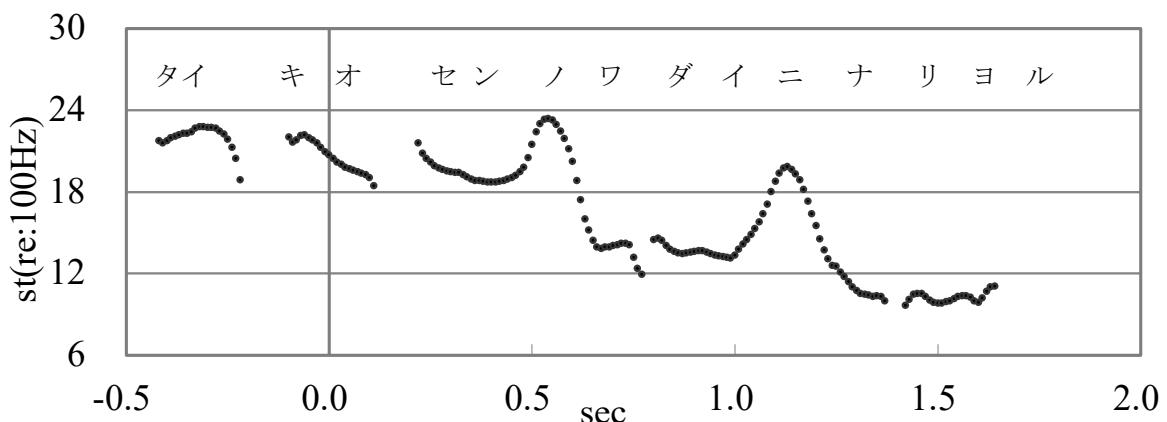


図3 パターン③話者5の「大気汚染の話題になりよる」のピッチ曲線

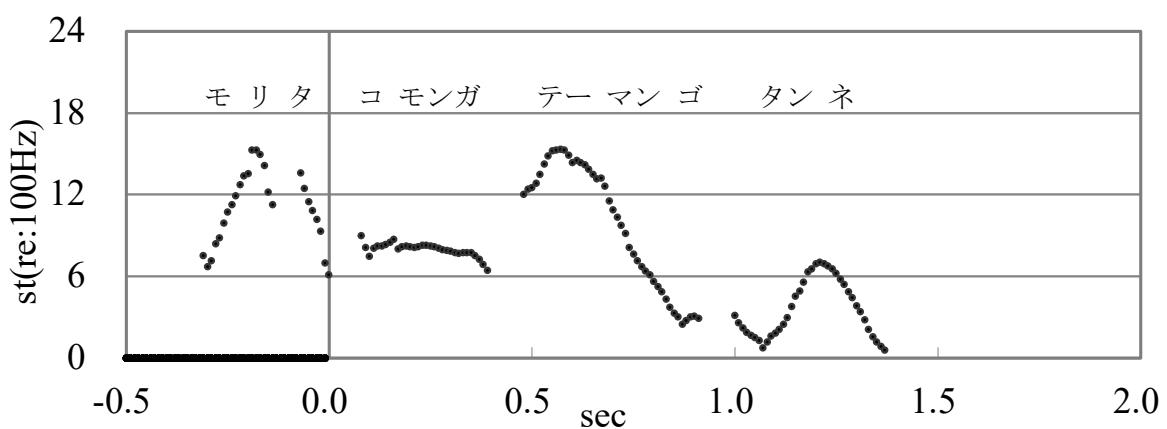


図4 パターン④話者7の「森田顧問がテーマんごたんね」のピッチ曲線

次に、話者2・5・7・8の発音パターンと特徴を表4にまとめる。

全体として、①や②のパターンであるものが多い。①～③は連續的なものであり、明確に区別することは難しいが、東京方言のように複合語の構造によって中高型の1単位になるものとそうならないものが明確に区別される、ということはない。

話者 7 の複合語のアクセントのアクセントパターンについては、東京方言で中高型の 1 単位で発音されないものが④（前部要素にピッチの下降があるタイプ）として発音される傾向にあり、東京方言におけるアクセント単位形成との間にある程度対応があるようと思われる。このことから、話者によつては、東京方言と同じように複合語の構成要素どうしの意味関係によってアクセントの実現が異なる可能性がある。しかし、話者 2・5・8 の複合語のアクセントのアクセントパターンについては（特に話者 2 については）東京方言におけるアクセント単位形成との間に今のところあまり対応が見られていない。今後、音響分析などにより、複合語の構造とアクセントパターンとの関係を詳しく観察する必要があるが、概してこの方言では複合語の構造に關係なく、

①～③の連続的な音声実現のどれかが現れると言えそうである。

表4 話者2・5・7・8の複合語のアクセントのアクセントパターンと特徴

話者	パターンと特徴
話者 2	①が多い。 ②も見られた。
話者 5	①が最も多い。 ②③④も見られた。
話者 7	①が最も多い。 ④がある程度見られた（25調査語に見られた）。 ②③も見られた。 ④で発音されたもの（25回）の中には、東京方言では中高型の1単位で発音されないと思われるものが多かった（19回）。
話者 8	①が最も多い。 ②④も見られた。 （「脅し文句」「国語辞典」僅かな数語の調査語に、東京方言における中高型の複合語アクセントのような発音が見られた。）

4まとめ

本研究では、熊本市および周辺地域の方言を対象に、無アクセント方言における複合語のアクセント単位形成について検討した。発音調査の結果、熊本市などで生まれ育った20-40歳台の若・中年層の話者は、複合語のアクセントの実現が東京方言に類似している傾向が観察された。一方、上益城郡の20歳台の話者、阿蘇郡の70歳台の話者、熊本市南区（旧飽託郡）の60歳台の話者、菊池市の50歳台の話者については、東京方言とは異なる傾向が観察された。具体的には、東京方言では複合語の内部の意味関係などによって中高型の1単位になる複合語とそうならない複合語があるが、上記の話者においてはそのような区別が明確には見られない。また、上記の話者による複合語のピッチパターンは東京方言のよう中高型ではないことが確認された。これは地域差、あるいは世代差、あるいはその両方によるものであると考えられる。

謝辞

調査にご協力いただいた皆様、様々な方を紹介していただいた方々に御礼申し上げます。多数の有益なコメントをいただいた査読者の方々に感謝いたします。本研究はJSPS科研費21K13018の助成を受けたものです。

引用文献

- 上野善道(1996)「複数のアクセント単位からなる複合語」『言語』25(11).57–63. 大修館書店.
窪瀬晴夫 (1995)『語形成と音韻構造』くろしお出版.
- 郡史郎 (2016) 「アクセントの複合形態と長い複合語のアクセント-『携帯電話電源オフ車両』などの説明原理についての覚え書き-」『音声言語 VII』.31-48.近畿音声言語研究会.
- 郡史郎(2022)「宮崎清武町における『無アクセント方言』の談話音調」『言語文化共同研究プロジェクト』2021. 1-18.
- 陳曦(2017)「後部要素が状態や動作をあらわす四字漢語のアクセント融合問題-統語的関係と意味の視点から-」『大阪大学言語文化学』26. 3-16.

「多民族方言」の形成 —首都圏在住南米人移民の日本語における変異と変化—

松本 和子¹・奥村 晶子²・松田 謙次郎³

1 はじめに

本稿は、国外の移民コミュニティに関する先行研究で指摘されている「多民族方言（multiethnolect）」の特徴や傾向が、日本国内でも観察されるかどうかを検証することを目的とし、茨城県常総市の南米人移民コミュニティで使われている日本語を調査・考察するものである。少子化と移民の増加により移民大国に変貌しつつある日本における日本語にどのような変異と変化が生じ得るか、その変化の方向や要因をコミュニティレベルで探る研究は見当たらないため、本稿はまさにそうした穴を埋めようとするものである。統計解析では松本・奥村（2024）の発表を向上すべく、多重共線性を考慮・回避し、一般化線形混合モデル（Generalized Linear Mixed Model, 以下 GLMM）を用いて話者間や語彙間の差も探っていく。本発表全体として、①ブラジルやペルーにルーツを持つ日系・非日系南米人移民の日本語が「多民族方言」の範疇に入る可能性を実証的に示すと共に、②地域方言が社会方言との接点で考察されるように、民族方言も方言研究の射程に加えることを提言する。

2 先行研究

移民との共生の長い歴史を持つ先進国では、これまで様々な「民族方言（ethnolect）」の形成と変容が報告されている。古典的な例は、米国の「AAVE (African American Vernacular English) アフリカ系アメリカ人英語」や「Chicanos」と呼ばれるメキシコ系アメリカ人英語等が挙げられる。近年は、複数の民族が肩を寄せ合って集住している大都市圏の多民族方言の研究が脚光を浴びている。代表的な例として、イギリスの「多文化ロンドン英語（Multicultural London English, LME）」（Cheshire et al. 2011）やカナダの「多文化トロント英語（Multicultural Toronto English, MTE）」（Denis et al. 2023, Hoffman and Walker 2010）がある。こうした研究では、移民コミュニティにおける「民族変異（ethnolectal variation）」あるいは多民族方言に関して、二つの傾向が指摘されている。一つ目は、移民の子供が「第二言語の集団習得（group second-language acquisition）」を通じて緩やかに特定の移民集団と結び付けられる特徴を使用し、時には「言語革新（linguistic innovation）」を生み出す傾向（Fox 2015, Cheshire et al. 2011）である。二つ目は、ホスト社会の方言を採用し、時には進行中の変化をリードする役割を担う傾向（Horvath 1985, Gramma et al. 2020）である。本稿は首都圏でもこうした傾向が観察し得るかどうかを検証する。

3 首都圏郊外の移民コミュニティと言語環境

茨城県常総市は、2021年時点での外国人居住者が人口の8.9%を占める地で、その多くが食品工場で就労している。この中でもブラジル人が最多で、次にフィリピン人、ペルーカーと

¹ まつもと かずこ（東京大学）

² おくむら あきこ（神田外語大学）

³ まつだ けんじろう（神戸松蔭女子学院大学）

続く（常総市 2021）。ブラジル人を顧客とするスーパー、レストラン、美容院、スポーツジム、ブラジル人学校等が揃い、ブラジルポルトガル語（以下 BP）だけで生活できる環境が整備されている。当該地でスペイン語を母語とするペル一人はブラジル人と共に働き、ポルトガル語で話し、子供をブラジル人学校へ通わせるなど、ブラジル人コミュニティで共存している。地元の教会ではポルトガル語やスペイン語、英語で定期的にミサが行われ、多言語対応の自動車学校やブラジル/ペルー食品店、フィリピン/ブラジルショップもあり、複数の民族が多言語環境で共生している。フィリピン/ブラジルショップ店内掲示には「No Credit! Credit Owari! Ashita OK!」（Matsumoto & Okumura 2020: 221）とあり、異なる国からやってきた移民の間で、日本語がある程度使われ、理解されていることが伺える。

移民の話す日本語について、本研究では 2 つの観点から分析し、考察する。まず移民言語からの音声転移の可能性を探る。具体的には、南米人移民の日本語に BP やペルースペイン語（以下 PS）からの音声転移がどの程度みられるかを示し、それを基に何らかの規則性があるか、どのような要因が関わるかを定量的・定性的に考察する。もう一つの観点として、ホスト社会の方言への適応の可能性を探る。シドニー英語研究（Horvath 1985, Grama et al. 2020）に倣い、ホスト社会で進行中の言語変化への移民の参加度合いを考察するために、移民がどの程度地元方言を習得したかを調べる必要があるためである。

関東東北部に位置する茨城県の方言は隣接する「奥羽方言の特徴を顕著に持」（大島 1975: 81）ち、「やや特色のうすい東北方言地帯」（宮島 1961: 236）として知られる。2006 年に旧水海道市と旧石下町が合併し常総市となつたが、1960 年頃には話者の世代や職業によって「方言的色彩の度合いについて無限の段階」があった（宮島 1961: 239–240）。この観察から半世紀以上を経た現在では、つくばエクスプレスをはじめとする公共の交通機関が改善され、都内への通勤・通学も可能となり、現代的な都心の日本語変種へ移行傾向にある。そこで、移民が伝統的な地域方言に含まれる東北方言的特徴にどの程度適応しているか、都心の日本語変種へどの程度移行しているか、どのような要因が関わるかを考察していく。

4. 調査の概要

分析対象は 2018 年から 2023 年までに収集した話者情報と語彙発話データである。調査対象者は一世が 22 名、二世が 41 名の計 63 名で、二世のうちブラジル人学校の在校/卒業生が 15 名、日本の学校の在校/卒業生が 26 名である。二世にはペル一人とブラジル人の親を持つ話者も 4 名含む。分析対象は、移民言語から音声転移の可能性のある 2 つの「言語変項（linguistic variable）」(1) (2)、地元の方言特徴への適応の可能性のある 3 変項 (4) (5) (6)、両者からの影響の可能性のある 1 変項 (3)、分析を進める過程で見つかった当初の想定とは異なる (7) 「革新形（innovative form）」と思われる 1 変項である。

- (1) ラ行子音の巻舌化（以下、巻舌化）（例：らくだ/rakuda/の語頭の/r/を歯茎震え音 [r]と発音）：語頭の /r/ は BP では[r]に加え、声門摩擦音[h]等（Matsumoto et al. 2024）、PS では[r]（Caravedo 1990）。語中（母音間）の単独 <r> は両言語ともに歯茎はじ

き音[r]。28語 1,890 件。

- (2) 促音/Q/の脱落（例：さつか/saQka/を[saka]と発音）：音節言語である BP/PS では促音は音素となり得ず、習得に困難があったと考えられる。6語 378 件。
- (3) 長母音/R/の短母音化（以下、短母音化）（例：いどう/idoR/を[ido]と発音）：BP/PS は母音の長短に音韻的対立ではなく、東北方言地帯とされる茨城方言は完全な長音を持たない（金田一 1943: 43）という報告がある。つまりモーラの独立性が弱く、音節が語の長さを測る単位となるシラビーム方言（柴田 1962, 大橋 2002）の特徴を持つ可能性がある。20語 1,260 件。
- (4) - (5) カ行・タ行子音（無声破裂音/破擦音）/k, t, c/の語中有声化（以下、語中有声化）（例：ちいき/tiRki/を[tʃi:gi], かたち/katati/を[kadafʃi]と発音）。/k/ 16語 1,008 件, /t, c/ 8語 504 件, 計 24語 1,512 件。
- (6) ガ行子音（有声破裂音）/g/の語中鼻音化（以下、語中鼻音化）：（例：ずが/zuga/を[zunja]と発音）。4語 252 件。
- (7) タ行子音（無声破裂音/破擦音）/t, c/の語中促音化（以下、語中促音化）（例：いた（居た）/ita/を[itta], うつわ/utuwa/を[uittsuwa]と発音）：8語 504 件。

(1) に関しては、日本人の日本語でも/r/を巻舌等で発音する場合・地域もあるが、移民言語からの音声転移であるならば、語頭の方が語中よりも巻舌化が起こりやすいことが見込まれる。また、(2) と (3) の促音と長母音はモーラ言語の特殊拍であり、音節言語である BP/PS 話者にとっては習得が困難であり、脱落/短母音化が見込まれる。しかし (3) 短母音化に関しては、上記の通り、シラビーム方言の特徴を持つ地元方言の影響も考えられる。

(4) ~ (6) の当該地の語中有声化と語中鼻音化も東北方言と共通する特徴である。語中鼻音化に関しては、1960 年代の時点で、東北で見られるような前鼻音は水海道では起こらず（宮島 1961: 238），鼻子音として発音されるに留まっていた。語中有声化に関しては、1970 年代の時点で、高齢層では有声化が安定して見られたが、中年層以下では改まった場面では生起率が低下していた（大島 1975: 89）。これら 7 変項を含む 84 語 5,292 件を分析する。

言語外要因として、①年齢（12 歳以下[16]/13 歳-20 代[25]/30-50 代[18]/60-70 代[4]），②性別（男[31]/女[32]），③世代と来日年齢の組み合わせ⁴（一世[22]/7 歳以降に来日した二世[5]/6 歳以下で来日又は日本生まれの二世[36]），④地元日本人住民との接触（濃い[36]/薄い[27]），⑤日本語能力（少し[13]/まあまあ[11]/できる[12]/よくできる[27]）を考慮した。

言語内要因として、先行/後続母音については開口度により分類し、語種は和語/漢語/外来語に分類した。巻舌化については当該音素の位置を、短母音化については母音の種類を、語中有声化については先行拍における長音の有無を、語中鼻音化については先行拍における鼻音（撥音だけでなくマ行/ナ行子音を含む）の有無を考慮した。一方、移民言語から音声転移の可能性のある 3 つの言語変項については、BP 話者のアクセント付与傾向を考慮し

⁴ 話者の世代と来日年齢には多重共線性が見られたため、組み合わせ、ひとつの言語外要因とし対応した。

た。BP/PS では強勢が置かれる音節で母音が若干長くなり、逆に強勢が置かれなければ長く発音されない傾向がある（彌永 2022, Quilis 1999）ためである。BP 話者 1 名（パラナ出身 20 代男性）に日本語の調査語の強勢位置を同定してもらい、これに基づいて①当該音節でアクセントが付与されなかったものを短母音化が見込まれる語（例：とりい），②当該音節でアクセントが付与されたものを短母音化が見込まれない語（例：つうろ）と分類した。

出現率の高かった「民族形 (ethnic forms)」の統計解析には GLMM を用いた。GLMM は、話者や語彙のように、従来の分析では性別、年齢集団、音声環境といったカテゴリーにまとめていた「個体差」を「ランダム効果」として組入れ、従来的な要因（「固定効果」と呼ぶ）と共に予測に用いる統計手法である。正規分布以外の確率分布も扱える一般線形モデル (Generalized Linear Model) の拡張として生態学から使われ始め、社会学、心理学、そして言語学でも使われるに至っている。今回の分析では上述のような各種固定効果に加え、話者別と語彙別をランダム効果として組込んだ。ランダム効果の大きさを示す ICC (Interclass Correlation Coefficient) はいずれの場合も目安とされる 0.1 を越えており、変異の説明要因として話者別と語彙別が関わることを示唆する。つまり、巻舌化、促音の脱落、そして短母音化の変異には、個人差と個々の語彙の特異性も関わっているわけである。

「方言形 (dialect forms)」の出現率は低く、分布も正規性を満たさなかっただけで、クラスカル・ウォリス検定（以下 KW 検定）と現地調査で得た民族誌的な知見を組み合わせる混合法を用いた。各解析では③世代と来日年齢の組み合わせと①年齢を「見かけ上の時間」(Bailey et al. 1991) と捉え、進行中の変化を考察する。

5. 分析

5.1 巷舌化、促音の脱落、短母音化の要因

まず移民言語からの音声転移と考えられる巻舌化と促音の脱落を促す要因について検討する。巻舌化では、GLMM の結果は表 1 のようであった⁵。①地元日本人住民との接触の濃淡、②日本語能力、③世代と来日年齢、④当該子音の位置の 4 つの予測因子からなるモ

表 1. 巷舌化に関する GLMM の結果 ($N = 1,890$, パラメータは推定値)

変数	パラメータ	オッズ比	z 値	有意差
切片	-3.887	0.020	-4.128	<0.001
世代・来日年齢（1 世成人後来日 vs. 2 世・6 歳以下來日）	-1.509	0.221	-2.169	< 0.05 *
世代・来日年齢（1 世成人後来日 vs. 2 世・7 歳以上來日）	-2.596	0.075	-2.239	< 0.03 *
性別（男性 vs. 女性）	-0.421	0.657	-0.660	0.509
日本語能力（少し vs. まあまあ）	-1.650	0.192	-1.692	0.091
日本語能力（少し vs. できる）	-0.105	0.901	-0.103	0.918
日本語能力（少し vs. よくできる）	-3.288	0.037	-2.514	< 0.02 *
地元日本人住民との接触度（薄い vs. 濃い）	-2.014	0.133	-2.118	< 0.05 *
当該子音の位置（語中 vs. 語頭）	7.131	1,250.379	9.730	< 0.0001 ***
後続母音（非狭母音 vs. 狹母音）	-0.977	0.377	-1.667	0.096

⁵ 表 1 のパラメータは従属変数に対する関係の大きさと方向を示し、オッズ比とはパラメータ値を指數変換した値である。例えば、世代・来日年齢（1 世成人後来日 vs. 2 世 6 歳以下來日）に関する結果は、他の条件が同じであれば、一世に比べて 6 歳以下來日 2 世は一世の 2 割程度しか巻舌化しないことを示す。

モデルが採用された。地元の日本人住民との接触が希薄な話者の方が濃厚な話者よりも巻舌を使い、日本語能力の低い話者の方が高い話者よりも巻舌を使う傾向が見える。また、一世の方が二世（来日時の年齢にかかわらず、6歳以下/7歳以上での来日者いずれ）よりも巻舌化させる傾向にある。言語内要因では、語頭（例：ろうか）の方が語中（例：たから）よりも巻舌化率が高まる傾向がある。先の通り、語中のラ行子音の環境は、母音間で尚且つ単独<r>であり、日本語でもBP/PSでも[f]で発音されるという点で一致していることから巻舌化率が低く、一方、語頭は日本語では[f]のままでも、BP/PSでは[f]あるいは[h]で発音される環境であるため、巻舌が出現しやすかったと考えられる。移民言語の/r/の体系が日本語へ持ち込まれた結果と言える。

促音の脱落では①地元住民との接触、②世代と来日年齢、③BP話者アクセント付与傾向の3要因からなるモデルが採用された（表2）。日本人住民との接触が希薄な話者の方が濃厚な話者よりも、一世の方が6歳以下で来日した二世よりも促音を脱落させる傾向がある。言語内要因では、促音を含む音節にアクセントが付与される語（例：とっしん）が付与されない語（例：さっか）よりも促音が脱落する傾向にある。促音を含む音節にBP話者がアクセントを付与すると促音が脱落しやすいのは、促音を含む音節にアクセントが付与されると、音節内の母音が長くなり、さらに促音まで入り込みにくくなるためと推察される。よって、アクセントが付与される音節において、促音が脱落しやすくなるのである。また、語彙的要因の可能性もある。調査語において促音のある音節にアクセントが付与された語は「とっしん」のみであり、この語において促音が突出して欠落していた。促音の調査語の中で、「とっしん」は唯一撥音を含む語でもあり、促音を含む箇所以外に撥音・長音・二重母音等が含まれる語では促音が脱落しやすいという杉本（2007：162）の指摘に合致する。

表2. 促音の脱落に関するGLMMの結果 ($N=378$, パラメータは推定値)

変数	パラメータ	オッズ比	z値	有意差
切片	2.536	12.631	2.197	<0.03
世代・来日年齢（1世成人後来日 vs. 2世・6歳以下來日）	-1.550	0.212	-2.795	<0.006**
世代・来日年齢（1世成人後来日 vs. 2世・7歳以上來日）	1.081	2.948	1.251	0.211
性別（男性 vs. 女性）	-0.380	0.684	-0.757	0.449
日本語能力（少し vs. まあまあ）	-0.187	0.830	-0.242	0.809
日本語能力（少し vs. できる）	0.353	1.423	0.411	0.681
日本語能力（少し vs. よくできる）	0.257	1.293	0.256	0.798
地元日本人住民との接触度（薄い vs. 濃い）	-2.272	0.103	-2.927	<0.005**
語種（和語 vs. 漢語）	0.532	1.703	0.756	0.450
語種（和語 vs. 外来語）	0.395	1.485	0.684	0.494
BP話者のアクセント付与傾向（あり vs. なし）	-1.894	0.151	-2.293	<0.03*

次に移民言語と地元方言どちらの影響も有り得る短母音化を促す要因について検討する。短母音化では①世代と来日年齢、②語種、③BP話者アクセント付与傾向の3要因を持つモデルが採用された（表3）。一世の方が6歳以下で来日した二世よりも短母音化させる傾向がある。促音の脱落と短母音化いずれにおいても未就学で来日した二世と一世の間に有意

差が見られることは、幼少期を過ぎるとモーラ言語特有の促音や長音の習得が困難になるという臨界期仮説（Lenneberg 1967）を支持すると言える。

表3. 短母音化に関するGLMMの結果 ($N = 1,260$, パラメータは推定値)

変数	パラメータ	オッズ比	z値	有意差
切片	0.895	2.447	1.055	0.291
世代・来日年齢（1世成人後来日 vs. 2世・6歳以下來日）	-2.105	0.122	-4.886	<0.001***
世代・来日年齢（1世成人後来日 vs. 2世・7歳以上來日）	-0.321	0.725	-0.475	0.634
性別（男性 vs. 女性）	-0.683	0.505	-1.736	0.083
日本語能力（少し vs. まあまあ）	-0.017	0.983	-0.028	0.977
日本語能力（少し vs. できる）	-0.511	0.600	-0.776	0.438
日本語能力（少し vs. よくできる）	-0.080	0.923	-0.102	0.919
地元日本人住民との接触度（薄い vs. 濃い）	-0.916	0.400	-1.555	0.120
語種（外来語 vs. 和語）	-2.517	0.081	-4.643	<0.001***
語種（外来語 vs. 漢語）	-2.386	0.092	-5.246	<0.001***
BP話者のアクセント付与傾向（あり vs. なし）	1.248	3.483	2.373	<0.02*
当該母音 (/aR/ vs. /iR/)	1.034	2.812	1.410	0.159
当該母音 (/aR/ vs. /uR/)	0.598	1.819	0.799	0.425
当該母音 (/aR/ vs. /eR/)	0.825	2.282	0.882	0.378
当該母音 (/aR/ vs. /oR/)	-0.201	0.818	-0.227	0.820

一方、言語内要因に関しては、語種効果として、外来語（例：カード）の方が和語や漢語（例：とおり、すうじ）よりも短母音化する傾向が出ている。この傾向は、東北方言や共通語における短母音化に関する結果と一致する。前川（2002）は大規模自発音声データベースを用いて共通語における短母音化の要因を検討し、カタカナ名詞における短母音化率は漢字語よりも高いことを指摘した。また大橋（2008）は秋田方言話者4名における短母音化についての分析の中で、東京の話者に比べ秋田方言話者の方が外来語において短母音化しやすいことを指摘した。東北方言はシラビーム方言とされ、古くは語種に関わらず短母音化が生起し得る体系であったと考えられる。しかし茨城方言における東北方言的特徴が減少傾向にあることを踏まえれば、現代の日本で衰退が進む東北方言において外来語が短母音化の残りやすい環境であるのと同様に、茨城方言においても外来語が短母音化の生き残りやすい言語環境であることが推察される。

BP話者アクセント付与傾向に関しては、当該音節にアクセントが付与され長母音が見込まれる語（例：くうき）よりも、当該音節にアクセントを付与しない語（例：そうりだいじん）の方が短母音化しやすいようである。よって短母音化を促す要因として、語種という日本語（東北方言・共通語）要因とBP話者のアクセント付与傾向という移民言語要因の両方が検出された。

5.2 語中有声化、語中鼻音化、語中促音化の要因

ここで方言形と革新形を促す要因を検討したい。まず語中有声化/鼻音化をそれぞれ単独で有意差検定を行ったところ、有意な要因は検出されなかった。方言形の出現が少ないと起因するものと思われる。そこで東北方言的特徴をまとめて検定したところ、話者の年齢に有意差が認められ ($\chi^2 = 8.885$, $p = .031$)、60歳以上の高齢層が他の年齢層よりも語

中有声化率/鼻音化率が有意に高い傾向があった。

なぜ高齢層が方言形を相対的に多く使用しているかを探るため、ここから高齢層の背景を詳しく見てみよう。60歳以上の話者は4名おり、その全員が方言形を使っていた。これら話者に共通する特徴は1990年前後に40代で来日し、自営業者として常総市に20年以上住んでいる点である（現在も経営を続ける者と現在は無職で敬虔な信者として教会へ通う話者である）。自営業者は工場の従事者と比べると、近隣住民や銀行、役所など地元の日本人との付き合いも多く、地元方言を習得する機会を多く持つ。つまり、高齢な南米人が方言形を比較的多く用いた理由としては、長年の地元住民との接触によって方言に適応した可能性を指摘できる。見かけ上の時間を用いて考察すると、高齢層の間で僅かながら出現する方言形が中年/若年層の間ではほぼ使用されず、消滅に向かっていると解釈できる。公共の交通機関の改善により都内へのアクセスも容易になり、都心の日本語変種へ移行傾向にある、という先の予想を支持する結果と言える。

語ごとの有声化率を見てみると、突出して高かった語は「ずこう」(23.81%)であった。なぜ「ずこう」が方言形で発音されやすかったのかに関しては、「ずこう」以外にも、「つみき」「ずかん」など、幼稚園や小学校でよく使われる語において有声化が見られたこととの関連が指摘できよう。これは推測の域を出ないが、小学校で図工がある前日には、連絡帳を通じて保護者へ翌日の持ち物が知らされる慣習がある。学校では方言形が使われており、子供は親や祖父母に普段通りに方言形で伝えていたのではないだろうか。

一方、語中促音化に関しては、そもそもなぜ常総市在住の南米人移民の日本語に促音が生じるのかが問題である。これも推測の域を出ないが、都会に憧れる若者や中年層が田舎を連想させる語中有声化を避けようとする過剰修正に由来する可能性を指摘したい。一般に無声音は有声音よりも閉鎖が強く、閉鎖持続時間も長い (Lisker 1957, Han 1962, 杉藤・神田 1987)。無声音として発音しようとするあまり、閉鎖が強くなり促音となつたのではないだろうか。同様の傾向は東北方言を基盤として形成された樺太日本語の研究でも観察されている (松本ほか 2023)。特定の地域に限らず、複数の地域で語中有声化を避けようとする方略として促音化が生じている可能性を示す重要な証拠と言えるだろう。

6. まとめと今後の展望

以上、国外の先行研究で指摘されている多民族方言の特徴や傾向 (2節参照) が、日本国内でも観察されるのかを考察した。その結果、(1) 緩やかに南米人と結び付けられる民族形の使用が観察されること、(2) そうした変異が移民社会の中で層化されるとともに、秩序だった体系性を持つこと、(3) ホスト社会で進行中の言語変化の方向に沿った変異を見ること、(4) その流れに乗るための言語革新 (東北方言の特徴を避けるための方略) が観察された可能性を指摘し、国外の先行研究で指摘されている傾向が首都圏郊外の移民コミュニティにおいて当てはまるることを示した。したがって、南米人移民の日本語は「多民族方言」の範疇に収まるものと考えられるのである。

しかし民族変異は一世では散見されたものの、二世では減少傾向にあることも判明した。

よって、現時点では南米人移民と結び付けられる多民族方言が定着しつつあるとは言い難い。なぜ多民族方言が消滅傾向にあるのか。ここでは2つの可能性を指摘する。まず、方言/言語接触下で多数派の変異形が生き残り、少数派の変異形が消失する平準化 (leveling) (Britain 2018) が起きた可能性である。もう一つは、Horvath (1985: 95) の言う「移民と関連付けられる低い評価 (low prestige) から出来るだけ自分達を遠ざけようとする」行為である。この場合、スピーチ・アコモデーションの（移民からの）差異化 (divergence) および（日本人への）収斂 (convergence) (Giles & Powesland 1975) に相当する。つまり無意識のうちに、あるいは意識的に、日本人との距離を縮めるために、移民と紐づけられる言語特徴を排除することで自分を移民から遠ざけ、日本人の話し方に近づけようとしたわけである。その一方で、例外的にこれと逆行する、日本人からの差異化に当たるような振る舞いも見られた。被験者の中には日本語能力が高くとも、頻繁に巻舌で発音する二世もいた。こうした二世は、日本の公立小学校へ入学したものの、日本の学校になじめず、ブラジル人学校へ転校している。日本語が流暢であっても、ブラジル人らしい話し方を意識し、仲間内の指標 (in-group markers) (Clyne et al. 2002) として民族形を使用しても不思議ではない。今後、巻舌化等が南米人移民を連想する民族変異として定着するか、それとも一世や日本語能力の低い二世にのみに見られる一過性のものに留まるかは、移民コミュニティにおける巻舌化等への意識・評価と関連し決定されるはずである。今後は、民族形がどのように認識されているか等を含め言語意識 (language perception) に関する探索も行いたい。

最後に、少子化と移民の増加により、移民大国に変貌しつつある現代日本における日本語に関する研究において、①多民族方言も地域方言化する可能性があること、②国外では社会方言や民族方言を地域方言と同等に、そして関連付けて研究していることを鑑み、民族方言も方言研究の射程に含めることを提唱し、結びに代える。

主な参考文献（紙幅の制限により発表時に全参考文献を提示することとする）

- 大島一郎. 1975. 「関東方言」 平山輝男・大島一郎 (共編)『新・日本語講座3 現代日本語の音声と方言』 東京：汐文社. pp. 81–102. / 大橋純一. 2002. 『東北方言音声の研究』 東京：おうふう. / 大橋純一. 2008. 「東北シラビーム方言における特殊音素の実現の実際」『いわき明星大学人文学部研究紀要』 21: 28–40. / 金澤直人. 1998. 「茨城県の方言」 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一 (共編)『講座方言学5 関東地方の方言』 東京：酷暑刊行会. pp. 79–100. / 金田一春彦. 1943. 「関東平野地方の音韻分布」『方言研究』 8. pp. 1–46. / 国語教育科学的研究会. 1961. 「言語調査—茨城県水海道市における音韻の調査—」『国語教育科学』 2(4): 34–42. / 佐々木冠. 1993. 「水海道方言における閉鎖音の有声化」『言語学論叢』 pp. 112–125. / 柴田武. 1962. 「音韻」 国語学 (編)『方言学概説』 東京：武蔵野書院. pp. 137–161. / 宮島達夫. 1961. 「方言の実態と共通語化の問題点—福島・茨城・栃木—」 東条操 (監)『方言学講座第二巻東部方言』 東京：東京堂. pp. 236–263. / Grama, James, Catherine E. Travis & Simon Gonzalez. 2020. Ethnolectal and community change ov(er) time: Word-final (er) in Australian English. *Australian Journal of Linguistics* 40(3): 346–368. / Hoffman, Michol & James A. Walker. 2010. Ethnolects and the city: Ethnic orientation and linguistic variation in Toronto English. *Language Variation and Change* 22(1): 37–67. / Matsumoto, Kazuko, Akiko Okumura & Kenjiro Matsuda. 2024. Transplanted Brazilian Portuguese in Japan: Mobility, contact, and koiné formation among Latin American immigrants. *Asia-Pacific Language Variation* 10(1): 40–66.

日本語諸方言における「麦粒腫」と「来訪神」の関連*

落合 いずみ¹

1. はじめに

麦粒腫（眼にできる腫物）を表す日本語の方言形式は多種多様であるが、日本語辞典の見出し語に挙げられるのはモノモライ（物貰い）だろう（2節）²。他家から物をもらうと眼病が治るという俗言から生じたと言われるが（小学館国語辞典編集部 2001b:1367）、本稿はこれを民間語源と見なし、古代日本において来訪神を表した語「まらひと」と、来訪神が皮膚病を祈祷する行為にその起源を求める折口（1975 [1928]）の説を紹介する（3節）。さらに麦粒腫を意味する来訪神類の語彙の分布を考察し（4節）、来訪神が携える器の名称と麦粒腫との関連を指摘することで（5節）、折口（1975 [1928]）の説を補充する。

2. 麦粒腫を表す日本語方言諸形式のこれまでの分類

小学館国語辞典編集部（2001b：1367–1368）は麦粒腫を表す形式について全国的に多様な表現が見られるが、コジキ類（モノモライ、メコジキ、メボイト、メカンジン等）、メイボ類、メバチコ類、その他に大別できると述べる³。コジキ類の例として挙げられたメコジキ、メボイト、メカンジンは *me* 「目」から始まる複合語である⁴。それぞれの複合語後部要素について佐藤（2019：80）は、コジキ「乞食」は本来「こつじき」、即ち僧が修行のため人家の門に立って食を乞い求める「托鉢」のこと、ホイトは「陪堂」（ほいとう）、カンジンは「勧進」に由来するとし、これらは仏教用語であると述べる。さらに徳川（1979：134）はコジキ類に属する形式としてヤッコとゼンモンも挙げている。

* 草稿段階の本稿に対し藤原敬介氏から改善のコメントをいただいたことに感謝する。ただし本稿の不備は筆者の責任である。

¹ おちあい いずみ（帯広畜産大学）

² これにはメノモライ、メモラ、メモライ、メシモライ、モライなどの変化形が見られる（徳川 1979:134）。メノモライはモノモライの語頭の *mo* が、「目」に引き付けられて *me* に変化したと考えられる。メノモライから語中の *no* が脱落してメモライ、語尾の *i* が脱落してメモラが生じたのだろう。また、徳川（1979:134–135）はインモライ、イモライという九州に見られる形式について「飯もらい」と「犬もらい」（「犬」はこの地域で *in* と発音する）の可能性を挙げるが、上述のメシモライは「mesi(飯)」の語源が明らかなため、インモライは「ii(飯)」の可能性が高い。徳川（1979:134）が琉球列島伊良部島（沖縄県）においてイーコヤという形式が見られ「飯乞う者」と解釈できることも「飯」の解釈を支持する。ただし「犬の糞」と解釈されるインノクソが九州に見られるところから（徳川 1979:135）、「飯もらい」を表す形式において *ii*「飯」が、*in* と変化した後に（*iimorai* > *immorai* > *inmorai* か？）、*in*「犬」に再解釈されたと考えられる。

³ 「メイボ」の「イボ」について徳川（1979:135）は突起物のいぼ（疣）と関係があり、目にできる疣であると説明している。さらに「この類は新しい語形である」と述べていることも、これよりさらに古い形式—コジキ類（本稿における来訪神類）—が存在することを示唆している。

⁴ ただし *me* を語頭に持たない形式である *koziki*, *hoito*, *kanzin* も日本言語地図（国立国語研究所 1968）に見られる。

また、小学館国語辞典編集部（2001b：1367）はこれら多様な麦粒腫の形式の分布と歴史的推移についても方言周囲論を踏まえた上で、メバチコ類が近畿中央にあり、それを取り巻くようにメイボ類が分布し、その外側にコジキ類が見られることから、コジキ類→メイボ類→メバチコ類という変遷が推定されると考察する（脚注3も参照されたい）。ただし、最も古いとされるコジキ類は上述の語例に見られるように意味的な繋がりをもった異なる語の集合体である。

3. 来訪神「なもみたくり／かせぎとり」と「物貰い」

大森（1960）によると岩手県下閉伊郡における民間伝承では正月だけ山から下りてくる神を「なもみたくり」と呼び、この神は泣く子を食うと言われている。日本語辞典（新村2008：2103）によると「なもみ」の意味は「火にあたりすぎて、腕や足などにできる斑。不精者の象徴とされる」とあり、「たくる」の意味の一つに「奪い取る」とある。「なもみたくり」は斑を取る神ということになる。この「なもみたくり」について、折口（1976〔1931〕：129）は菅江（1967〔1794〕：99）に述べられる「かせぎとり」という語と同一だと見なす。内田武志氏・宮本常一氏による注釈（菅江1966〔1786〕：33）では「かせぎとりの行事は関東地方の北部から東北地方へかけて、また九州地方南部にも古くから行われている。カセドリともいっている。九州ではカセダウチの名がある」と説明する。折口（1976〔1931〕：130）は「なもみ系統の語は、皆皮膚病を意味する語であつて、皮膚に出てゐる斑點を取りに、或いはとがめに來るもの、それをかせとり、なもみたくり、なまはげといふのであつて、皆同一類のもの」と考察する。以下に菅江（1966〔1786〕：5）が胆沢郡徳岡（岩手県南部）において1786年1月12日からの数日間「かせぎとり」が来訪する様子を描いた部分を引用する（太字は筆者による強調）。

早朝から粉雪が降ってひどく寒い。昼すぎるころから若い男たちが大ぜい、肩と腰とにけんだいという稻藁であんだ蓑のようなものを着て、蓑笠をかぶり、小さな鳴子をいくつも胸と背にかけて、いちこというわらで編んだ手籠を提げて、木貝を吹きならし、馬鈴を振り鳴らしたり、また、くつわ、鳴り鉢というものをうち振りながら、人の家に群れ入ると、米を与えて餅をくれてやる。いつまでもやかましく騒ぐと、鳥を追うように「ほうほう」と声をあげるとみな去ってしまう。ものを与えてから、水をうちかけるのがならわしあつた。これはみな村々の若い男たちが**無病息災**のためにするまじないの行為であるという。追うとけろと鶏の鳴きまねをして逃げ、深い雪を踏みちらし、どよめきさわぎ、夜のふけるまで歩きまわる。これをかせぎとりといった。南部路のかせぎとりはこれにやや似ているが、少し異なり、このような蓑笠を鹿の角の形に作り、それに竹をさして、棒を突きながら、いちこ（手籠）をもつ

て餅をもらいあるく。餅を与えた家では祝の水と称して水をあびせる…筒子というものや、樽をもって来るものには、家々の手作りの酒をやるのである。

「かせぎとり」と呼ばれる来訪神は正月になると、家々を回って無病息災の祈祷をし、その見返りとして餅や酒を、携えて来た手籠や筒に受け取ることが記されている。これは18世紀末の状況であるが、折口（1975〔1928〕：401-402）は20世紀前半における来訪神について以下のように記している。

今から四年前（大正十三年）の初春でした。正月の東京朝日新聞が幾日か引き續いて、諸國正月行事の投書を発表した事がありました。其中に、

なもみ剥げたか。はげたかよ

あづき煮えたか。にえたかよ

こんな文言を唱へて家々に躍り込んで来る、東北の春のまれびとに關する報告がまじつてみました。私は驚きました…雪に埋れた東北の村々には、まだ、こんな姿の春のまれびとが残つてゐるのだ。年神にも福神にも、乃至は鬼にさへなりきらずにゐる、畏と敬と兩方面から仰がれてゐる異形身の靈物（モノ）があつたのだ。こんな事を痛感しました。私はやがて、其なもみの有無を問うて來る妖怪の爲事が、古い日本の村々にも行はれてゐた、微かな證據に思ひ到りました。かせ・ものもらひに關する語原と信仰とが其であります…真澄の昔も、今の世も、雪間の村々ではなもみを火だこと考へてゐる事は、明らかです。が、火だこを生ずる様な懶け者・かひ性なしを懲らしめる為とする信仰は、後の姿らしいのです。

折口（1975〔1928〕：401-403）は約百年前にも「なもみたくり／かせぎとり」の来訪神の風習がその祈祷の言葉「なもみ剥げたか、剥げたかよ」に残っていたことを述べ、以下の引用では来訪神としての「かせぎとり・かせとり・かさとり」が「ほがひびと」と意味的に重なることを考察する⁵。そして「ものもらひ（もの貰ひ）」と呼ばれる目の腫物の名称の由来を、春の来訪神が瘡治療の祈祷をする行為に求める。

かせとり・かさとりとも此を言ふ様ですが、此稱へでは、全國的に春の

⁵ 「ほがひびと」は「ほがいびと」として日本語辞典（新村 2008:2578）に挙げられている。「ほがい」の歴史的仮名遣いはホガヒであり、平安時代まで清音であったと記されている。「ほがい」に相当する漢字表記は「寿」「祝」であり、「ほがいびと」は「乞兒」、「ほがいびと」は「人の門戸に立ち寿言（ほがいごと）を唱えて回る芸人。物もらい。こじき」と記されている。

ほかひゞとの意味に用ゐてゐます。かせはこせなどゝ通じて、やがて又瘡（かさ）・くさなどゝも同根の皮膚病の汎稱です。此をとりに來るのは、人や田畠の惡疫を驅除する事になるのです。なもみはぎ・かせとりの文言は形式化したものであります、春のまれびとの行つた神事のなごりなる事だけは、明らかになつて居ました。

ものもらひなどもさうです。恐らく、春のほかひゞとが此に關係して居つた爲の名でせう。ばらばらに分布してゐる、此目瘡の方言まろとなる稱へは、祝言・ことほぎがまだ、原信仰を存して、まらうどのするものとした時代から、ほかひ（乞士）・もの貰ひの職となつた頃まで、引き續いてみた事を見せてゐる様に思ひます。即、まれびと瘡が、なもみの一種であつたらしい、と言ふ假説を持つてゐたのであります。

折口（1975〔1928〕：402）は麦粒腫のことを「目瘡」と記しているが、これに相当すると考えられる *megasa* という形式が「麦粒腫」の日本言語地図（国立国語研究所 1968）にみられる⁶。また、折口（1975〔1928〕：402）はカサとクサを同源語と見なす。これを裏付けるように *mekusa* という形式が国立国語研究所（1968）では福井県に見られ、*mekusa* から派生したと考えられる *mekusare* が新潟県に見られる⁷。

また折口（1975〔1928〕：402）は「目瘡」の方言形式として「まろと」が散在的に分布していると述べる。これは、国立国語研究所（1968）において *marooto*、佐藤（2004：1275）において *maroodo* に相当する形式である⁸。折口（1975〔1928〕：402–403）は「まろと」「まらうど」「まれびと」を同源語と扱っているが、これらは上代日本語の「まらひ_甲と_乙」（まら「稀」、ひ_甲と_乙「人」）に遡り、意味は「客」である⁹。これに関し、折口（1975〔1927〕：5）は「ひと」という語について「人間の意味に固定する前は、神及び後繼者の義があつたらしい」と述べ、まれびとは「來訪する神」の意味であると提案する。

4. 「麦粒腫」を表す來訪神類

來訪神を表す語を「麦粒腫」として應用するタイプを本稿は來訪神類と呼ぶ。2 節では *monomorai* がコジキ類に属することを述べたが、來訪神を表す語が *monomorai* 等の乞食を表す語に変わっていったので、コジキ類は來訪神類と読み替えられる。本稿は來訪神類に含まれると考えられる形式としてもう一つ *okyakusan* を含める。この形式は国立国語研究所（1968）によると佐賀県、長崎県に見られる。「お客様」と表現しているが、これは「ま

⁶ *Megasa* は熊本県、奈良県、長野県に点在している。メイボ類は「疣」、*megasa* は「瘡」にという皮膚病の名称を目に適応しているが、類似の語形として *iyonome/yonome* 等（国立国語研究所（1968）では青森県に分布）も含められるだろう。これらについて佐藤（2019:80）は「いをのめ」（魚の目）との関連を示唆している。

⁷ この *mekusare* の後半 *kusare* は、「腐れ」に引き付けて *kusa* に *re* を加えたものと考えられる。

⁸ 佐藤（2004:1275）における表記は「まろーど」である。

⁹ この形式は上代語辞典編修委員会（1967:692）から引用した。

らひと」が客を表す語であることに通じる。表 1 に来訪神類の代表的形式とそれらの地点を地方名と都道府県名（括弧内）で挙げる¹⁰。

表 1 「麦粒腫」を表す来訪神類とその分布¹¹

<i>monomorai</i> 系	東北（秋田、宮城、山形、福島）；関東（栃木、茨城、千葉、群馬、埼玉、東京、神奈川）；中部（新潟、長野、山梨、富山、石川、福井、静岡、岐阜、愛知）；近畿（三重、奈良、和歌山、兵庫、滋賀）；中国（鳥取、島根、岡山、広島、山口）；四国（徳島）；九州（福岡、大分、佐賀、熊本、宮崎、長崎、鹿児島）
<i>koziki</i> 系	関東（山梨）；中部（愛知、静岡、岐阜、長野）；近畿（和歌山、奈良、三重）
<i>hoito</i> 系	東北（宮城、山形、秋田）；中国（山口、島根、鳥取、広島、岡山）；近畿（兵庫）；九州（福岡、大分）
<i>kanzin</i> 系	中部（静岡）；九州（熊本）
<i>marooto</i> 系	中部（愛知）；中国（岡山、鳥取、島根）；四国（高知、愛媛）
<i>okyakusan</i>	九州（佐賀、長崎）
<i>yakko</i>	東北（秋田）
<i>zenmon</i> ¹²	九州（熊本）

まず、この中で下から三つの *okyakusan*、*yakko*、*zenmon* は地域が一ヶ所に限定されているため、この地域で起こった革新と考える。次に、*monomorai* 系、*koziki* 系、*hoito* 系、*kanzin* 系については京都市を中心として「麦粒腫」の分布地図（国立国語研究所 1968）にコンパスで各形式の最遠地を基準に同心円を描いたところ、外側から *hoito* 系、*monomorai* 系、*kanzin* 系、*koziki* 系の順になった。ただし、*koziki* 系が近畿周辺で比較的小さな同心円を描いたのに対し、*hoito* 系、*monomorai* 系、*kanzin* 系の三つの同心円は共に北は東北、南は九州で同心円を描き、互いに極めて距離が近いためほぼ同時代に広まった形式と考えられる。

次に *marooto* 系について詳述すると、国立国語研究所（1968）では中国・四国地方の 7 地点で報告されている。そのうち 2 地点（岡山、高知）は海際であり、残り 5 地点は山間の県境（高知・愛媛県境、岡山・広島県境、岡山・兵庫県境、島根・鳥取県境、広島・島根・

¹⁰ 地点については国立国語研究所（1968）を参照にした。*monomorai* 系には「もらい」または「もの」を持つ形式（*monogurai*, *menomorai*, *memorai*, *memora*, *memoro*, *memore*, *mesimorai*, *morai*, *moremore*, *mono*, *minomono*, *memono*, *monome*, *monouri*, *inmorai*, *imorai*, *imora*, *innomono*）も含めた。*koziki* 系には *mekoziki*, *kozikime*；*hoito* 系には *hoita*, *horute*, *meboito*, *meboita*, *hoitonoyado*；*kanzin* 系には *mekanzin*；*marooto* 系には *maroodo* を含めた。

¹¹ 北海道は明治期以降の移住者が日本人人口の大多数を占めるため、本稿の分布的考察から外しているが国立国語研究所（1968）を見ると北海道における来訪神類は *monomorai*, *hoito*, *yakko* が挙げられる。

¹² ゼンモンは榎垣（1951：238）によれば「前門」と表記され、乞食、物もらいと意味が記されている。一方木村・小出（2000：664）では「禪門」と表記されている。

鳥取県県境)に位置する。さらに *maroodo* が愛知県知多郡(太平洋岸)と岡山市(南部は瀬戸内海に面する)に見られる(佐藤 2004: 1275)。これら点在する *marooto* 系は古い形式の残存ではないだろうか。海岸・山間という環境下で古形を保ちえたが他地域ではより新しいメイボ類、メバチコ類、又は来訪神類の他形式(表 1)に取り換えたのではないか¹³。

次に来訪神の呼び名の変遷から考えると、折口(1975 [1928]: 401–403)は、春に訪れる来訪神「まれびと」が麦粒腫、または「まれびと瘡」とも呼ばれたかもしれない病を除く祈祷を行っていた原始信仰時代があり、その来訪神の名称「まらひと」自体が麦粒腫を表す名称としての *marooto* に変わったことを示唆している¹⁴。さらに、折口(1975 [1928]: 401–403)の記述を解釈すると、原始時代において「まらひと」と呼ばれた来訪神の呼び名に変化が起こるようになる。祈祷行為が「ほかひ(乞土)・もの貰ひの職」に変化すると民衆は来訪神に対する畏敬の念を失った¹⁵。原初に *marooto* と呼ばれていた来訪神は「ほかひ」や「ものもらい」など乞食を表す語にとって代わられた。しかし、瘡を除く祈祷は来訪神の行為であり続けたため、来訪神を表す語が乞食類の語に推移するとともに、麦粒腫を表す語として *hoito* 系、*monomorai* 系、*kanzin* 系、*yakko*、*zenmon* などの語が生じたのだろう。

5. 「麦粒腫」を表す容器類

国立国語研究所(1968)による麦粒腫の方言形式には *mekago/mekaigo* という特殊なものが栃木県、群馬県に見られるが佐藤(2019: 80)によると *meka(i)go* は「ざる(笊)」の一種である。『尾上松緑百物語』(尾上 1826)に、麦粒腫の民間療法として「井戸の中へ笊を半分見せ、治りなばみんな見せんと願を懸くれば、禁厭(まじなひ)にて即座に治る」とある¹⁶。麦粒腫を表す *meka(i)go* との名称はこの俗信に由来するらしい(佐藤(2019: 80)、徳川(1979: 135))。これと類似したものとして、和歌山県南端に *gokinozoki* という形式が見られるが(国立国語研究所 1968)、これは「御器覗き」だろう。「井戸が御器を覗く／井戸に御器を覗かせる」といった意味と考えられる。ここで思い起こされるのが菅江(1966 [1786]: 5)の記述において来訪神「かせぎとり」が藁で編んだ籠を携えていたことであり、この籠に餅の施しを受けていたことである。上記の民間療法の起源は来訪神が行った行為に求められるのではないか。笊を使って祈祷を行ったことが想像の域を出ないが考え

¹³ ちなみに表 1 の中、上代日本語(上代語辞典編集委員会 1967)として記録されている語は「まらひ_甲と_乙」(> *marooto/maroodo*)と「やつこ_甲」(> *yakko*)の二つである。「こつじき」(> *koziki*)、「ぜんもん」(> *zenmon*)、「ほいたう」(> *hoito*)は中世日本語として室町時代語辞典編集委員会(1989, 1994, 2004)に見られる。文献における「ものもらい」の出現(ただし乞食の意味)は小学館国語辞典編集部(2001b: 1367)によると 17 世紀、小学館国語辞典編集部(2001a: 1307)によると「かんじん」は 9 世紀である。

¹⁴ 落合(2024)は上代日本語「まらひ_甲と_乙」から「まらうと」「まらうど」「まろうと」「まろうど」「まらびと」などに至る過程と音変化を説明した。麦粒腫として用いられる *marooto* は上記形式の中の「まろうと」において、母音連続 *ou* が長母音 *oo* に変化したものと見なせ、*maroodo* は上記の「まろうど」の母音連続 *ou* が長母音 *oo* に変化したものと見なせる。

¹⁵ この変化は 7 世紀後期の律令制導入以後に起こったと考えられる。

¹⁶ これは小学館国語辞典編集部(2001b: 1367)から引用した。

られる。

2 節において僧が食べ物の施しを受ける行為を托鉢と呼ぶと述べたが、施しを受ける器がはち（鉢）である。麦粒腫を表す類の一つにメバチコ類がある。これについて佐藤（2019：80）は「大阪附近のメバチコや新潟のメッパツの語源は不明」と述べているが、前者 *mebachiko* は *me*（目）と *bachi*（<*hachi*（鉢））、そして *ko*（子？）から成る複合語ではないだろうか。ここから語末音節 *ko* が脱落し、子音 *b* が無声化・促音化し、母音 *i* が *u* に変わって新潟県に見られる *meppacu* が生じたのだろう。国立国語研究所（1968）には *meppa* という形式が青森、秋田、群馬、埼玉、静岡に分布しているが、これは *meppacu* から語末音節の *cu* が脱落したものではないか。

小学館国語辞典編集部（2001b：1367）によるとメバチコ類は「麦粒腫」を表す形式としては最も新しいということであるが、この場合は大阪府を中心に広がる *mebachiko* の分布のみを考慮していたのだろう。この類に *meppacu* と *meppa* を含めるとしたら、上述の断裂的な分布をどのように捉えるべきか。日本海側に注目すると青森、秋田に見られる *meppa* は、新潟県離島の粟島浦村、山形県離島の飛島にも見られる。このことは新潟付近を拠点に *meppa* が日本海側を秋田、青森へと北上したことを推察させる。さらに 18～19 世紀に栄えた交易船である北前船の日本海廻りの航路（大阪～北海道）をも想起させる。大阪を発した *mebachiko* は音変化を経ながら日本海側を北上し、新潟に *meppacu* として、秋田、青森に *meppa* として根付いたのではないか¹⁷。

6. おわりに

まとめると、日本語諸方言において麦粒腫を表す語として広く見られる形式はコジキ類、メイボ類、メバチコ類、その他に大別され、この順に近畿から伝播したと考えられている。目瘡とも呼ばれる麦粒腫は折口（1975 [1928]：401–403）によれば「まらひと」と呼ばれた春の来訪神が治癒の祈祷をしたものだった。この来訪神の名称自体が麦粒腫をあらわす語として適応されるようになる。その後「まらひと」が「物貰い」として蔑まれるようになるとともに、麦粒腫を表す *marooto* 系が *monomorai* 系など乞食を表す語に変わっていった。本稿はコジキ類を来訪神類と改め *hoito* 系、*monomorai* 系、*kanzin* 系、*kojiki* 系、*yakko*、*zenmon* の他に、*marooto* と *okyakusan* もこの類に加えた。ただし、この類は意味で繋がった異なる語形の集合体である。これら多様な語形の中で最も古く用いられていたのは、語の古さと来訪神の呼び名の推移、辺境に散在的に残存する分布を根拠として *marooto* 系と考えられる。さらに、来訪神が食物を受け取る器が、麦粒腫を表す方言形である *mekai(go)*、*gokinozoki*、*mebachiko* と関わっている可能性にも言及した。日本語では来訪神を表す語彙が麦粒腫をも

¹⁷ 北前船との関連は、松本（2013:204–216）における「ハンカクサイ」（アホ・バカの意）の近畿から能登半島、東北への伝播についての考察に手がかりを得た（これは大西拓一郎氏による指摘とのことである）。ただし、*meppa* について群馬・埼玉・静岡県における分布を説明するのは難しい。

表すものとして応用されたが、このような言語は稀ではないか。この来訪神、麦粒腫の二つの概念とそれらの形式的繋がりの中に古代日本の信仰が垣間見える。

参考文献

- 上代語辞典編修委員会（編）（1967）『時代別国語大辞典上代編』東京：三省堂.
- 木村義之・小出美河子（2000）『隠語大辞典』東京：皓星社.
- 国立国語研究所（1968）『日本言語地図第三集』東京：国立国語研究所.
- 松本修（1993）『全国アホ・バカ分布考—はるかなる言葉の旅路—』東京：新潮社.
- 室町時代語辞典編集委員会（1989）『時代別国語大辞典室町時代編二』東京：三省堂.
- 室町時代語辞典編集委員会（1994）『時代別国語大辞典室町時代編三』東京：三省堂.
- 室町時代語辞典編集委員会（2004）『時代別国語大辞典室町時代編五』東京：三省堂.
- 大森郁之助（1960）「岩泉聞書」『民間伝承』24（7）：43–45.
- 落合いづみ（2024）「上代日本語 marapitö とアイヌ語借用形 maratto の歴史的考察」日本北方言語学会第7回大会研究発表. 室蘭工業大学, 2024年9月22日.
- 尾上梅幸（1826）『尾上松緑百物語』
- 折口信夫（1975〔1927〕）「國文學の發生」折口博士記念古代研究所（編）『折口信夫全集第一卷：古代研究（國文學篇）』3–62. 東京：中央公論社.
- 折口信夫（1975〔1928〕）「翁の發生」折口博士記念古代研究所（編）『折口信夫全集第二卷：古代研究（民俗學篇1）』371–415. 東京：中央公論社.
- 折口信夫（1976〔1931〕）「春來る鬼」折口博士記念古代研究所（編）『折口信夫全集第十五卷：民俗學篇1』371–415. 東京：中央公論社.
- 佐藤亮一（2019）『方言の地図帳』東京：講談社.
- 佐藤亮一（編）（2004）『標準語引き日本方言辞典』東京：小学館.
- 新村出（編）（2008）『広辞苑第六版』東京：岩波書店.
- 小学館国語辞典編集部（2001a）『日本国語大辞典第二版第三卷』東京：小学館.
- 小学館国語辞典編集部（2001b）『日本国語大辞典第二版第十二卷』東京：小学館.
- 菅江真澄（1966〔1786〕）「かすむ駒形」内田武志・宮本常一（編）『菅江真澄遊覧記第二卷』3–45. 東京：平凡社.
- 菅江真澄（1967〔1794〕）「奥のてぶり」内田武志・宮本常一（編）『菅江真澄遊覧記第三卷』96–110：東京：平凡社.
- 徳川宗賢（1979）『日本の方言地図』東京：中公新書.
- 模垣実（1951）『隠語辞典』東京：東京堂出版.

脱穀を意味する「おす」と「おし」—東北・関東の自治体史誌等の記述から—

榎本 直樹¹

1 はじめに

本発表では、穀物などの脱穀における「おす」「おし」を取り上げる。ここで扱う資料は、自治体史（誌）などに収録された、農村の生活文化についての聞書、日記などであり、そのほとんどは民俗・民具研究者、郷土史研究者によって記述されたものである。最近、発表者はこれらの雑多な資料の中の“ことば”を手掛かりに脱穀技術を分析した¹。近年の民俗学では稀な民俗語彙²による研究法であるが、ささやかな成果を上げることができたと考える。ただし、これは発表者の手に余る“ことば”そのものの問題でもあると考えた。そこで、雑駁なものながらも、改めてここに提示し、専門の方々のご指導を賜りたいと願うものである。

（以下、事例中の下線は発表者による）

菅江真澄は、『雪の出羽路』（文化年間 1804～18）において、次のように述べている。

- ・事例1 粋を押ス 『雪の出羽路』「平鹿ノ郡 四」 〈 〉は原典ふりがなを示す。
むかしより荒稻〈アラシネ〉を搗ク事を粋〈モミ〉を押_スてふ俗語〈サトヒゴト〉あり³

（内田武志・宮本常一編（1976）『菅江真澄全集第6巻』未來社, p. 152）

臼で荒稻（＝粋）⁴を搗くことを「押ス」という方言がある、という。実際、近代でも、臼で粋を「搗く」ことを「おす」というだけでなく、棒や唐竿（クルリボウ）などの道具を用いて「打つ」「叩く」ことを「おす」ということが、広く見られた。

この記述の舞台となった出羽地方を手始めに、いくつかの関連事例を掲げてみる。

- ・事例2 粟おし 昔話「粟ぶくと米ぶく」山形県鹿角市 昭和50年 〔 〕は報告者による要約
(主人公の「粟ぶく」は、早く村の祭りに出かけたい。ところが、継母は粟ぶくに、風呂の水汲みをいいつけ、さらに次のようにいいう) 庭さ、のろと粟あひろげて、「この粟みんなおしておけ」て…。
(継母と実子は祭りに行ってしまうが、粟ぶくは、通りかかった和尚の助力で水を汲む) それからこだ、粟おししたども、仲々はけええがなくてらば(はかどらないでいたら)、雀こだあ、えっへえあじまつてきて、チュンチュンチュンなきながら粟おしし、羽こでバタバタやればボボーと糠もとんでしまるし、これもえっとごまに(ちょっとの間に) でけでしました。

（八幡平長嶺 阿部チヤ氏 68歳。高橋節夫ほか「鹿角のむかしこ（一）」花輪町誌編纂資料調査委員会編（1975）『花輪町誌編纂資料』第2号, pp. 65-67）

これは昔話という架空世界のためか、「粟おし」の内容はよくわからない⁵。しかしこれは、粟を棒で打ち叩く脱穀作業を「しなおし」と呼び、報告者はその語源に疑問を呈している。

- ・事例3 しなおし 山形県鹿角地方 昭和28年
しな-おし 粟の脱穀 (中略。粟の) 穂ヲ長キ板ノ上ニ並ベ、数人左右ニ別レ向キ合ヒテ坐リ、各手ニセル細キ棒ニテ、唄ヲ謡ヒ拍子ヲ取リナガラ、左右交互ニ打チ叩キテ脱穀ス、之ヲ_シなおしト云ヒ、陽春ノ一風景ナリシガ、今ハ脱穀ノ方法進歩シ、十年位前ヨリ、しなおし唄ノ声ヲ聞クコトナキニ至レリ。語源不明。(大里武八郎（1953）『鹿角方言考』鹿角方言考刊行会, p. 129)
ここには「しなおし唄」とあるが、より知られているのは、次のような「粟押唄」であった。

¹ えのもと なおき (埼玉大学教養学部非常勤講師) inari@ceres.ocn.ne.jp

・事例4 粟押唄 山形県鹿角市 昭和27年 (唄の詞章は略す)

粟押唄 陸中国鹿角郡宮川村 (日本放送協会〈1992〉『復刻日本民謡大観東北篇』P.226 〈初版 1952〉)

以上、あえて特殊な例を挙げてみた。実は早くも大正時代、文部省が編纂した全国民謡集『俚謡集』に、麦の脱穀ではあるが、これに類するものが東北、関東で1例ずつ紹介されていた。

・事例5 のがおし歌 (千葉県)、麦押歌 (茨城県) 大正3年 (唄の詞章は略す)

のがおし歌 千葉県印旛郡／麦押歌 岩手県気仙郡 (文部省〈1914〉『俚謡集』p.166, 264)

粟の脱穀と同様に、麦の穂打ちは、重労働であったことから、複数の作業者の気分を整え、動作を揃えて効率を上げるために、唄を伴った。こうした仕事唄は、庶民の伝統文化として、農作業そのものよりも早く注目・紹介された。そうした中に、「おし」が記録されてきたのである。

・事例6 ムギオシ、麦おし唄 埼玉県比企郡ときがわ町 昭和13年

ムギオシ クルリで麦を叩くこと。麦おし唄に「いわどの山で鳴く鳥、声もよし音もよし岩のひびきで」「お前さんのかけた前掛は可愛いあの人のタレキで出来た前掛だ」。

(小西ゆき子(1938)「秩父郡大柄村語彙」『方言』8巻2号, p.163, 卷通しノンブル p.256)

埼玉県の「麦押唄」も早くから知られ、戦後早い時期の民俗学では把握されていた。

・事例7 ムギオシウタ 埼玉県比企郡 昭和30年

ムギオシウタ 麦押唄。埼玉県比企郡地方の唄 (埼玉郷土研究資料)。「岩との山でなく声は／声もよし音もよし岩のひびきで／伊草の宿は長い宿／長けれども一夜の宿がござらぬ」

この唄と同じものが同県入間郡にもあり、これを麦打唄といっているが、その囃子に「やれおせそれおせ」とあるからもとは押すといったのであろう。

(民俗学研究所(1955)『総合日本民俗語彙第4巻』平凡社, p.1548)

「やれおせそれおせ」という囃子詞が、麦打ちを「押す」ということと結びつけられている。

東北でも、戦後早い時期に刊行されたものには、「麦打」「麦押」が併記されている。

・事例8 麦打唄・麦押唄 昭和40年

麦打・麦押唄 田植えの済んだ後、秋播き麦が刈りとられ、乾燥を待って麦打ちが行われる。

(岩手県(1965)『岩手県史第11巻民俗篇』p.711)

このように仕事唄・作業唄の中に「麦押唄」があることは早くから知られてはいたが、『日本民俗大辞典』(吉川弘文館 2000)に代表されるように、現在の民俗学には必ずしも継承されていない⁶。また、仕事唄に遅れて、1970年代～2000年代、農村の伝統的な生活文化を対象とする調査において、農作業の「おす」「おし」が記録されたが、これまで注目されなかった。

管見のかぎりでは、これらの「おし」を説明する文献は見当たらない。ただ、『日本国語大辞典』の「むぎおし」【麦押】の項は、「麵類などを作る時、こねた小麦粉を押し延ばす棒、麵棒、麦押木」、つまり「のし棒」であるとする一方、方言で「殻竿〈からざお〉で麦をたたき脱穀すること (埼玉県秩父郡)」⁷という例を挙げている。これは事例6のことである。

以下、東北から関東にかけて存在するこの事象について、地域におけるそのありようを具体的に見ていくたい。ただし、資料上の偏りから、麦と稻に関するものにしぼった。

2-1 穂打ちとしての埼玉の麦おし、芒おし

麦(大麦)の脱穀では、図1のように、まず、麦束を、麦打ち台に打ち付ける(A)、あるいは千歯扱きで扱く(B)、火で穂首を焼く(C)などして、穂を落とした。その次に、①穂から麦粒

をはずし（脱粒する）、②芒（ノギ、ノゲ、ノガ。麦粒先端の突起）を除去する（脱芒する）ために、穂打ちが行われた。関東では、写真のように、唐竿（クルリボウ）が広く用いられた。

図2は、唐竿による穂打ちの作業名称の分布である⁸。

埼玉県内には、作物である「麦」、部位を示す「芒」「穂」（道具の「棒」とも）、道具などと動詞が結

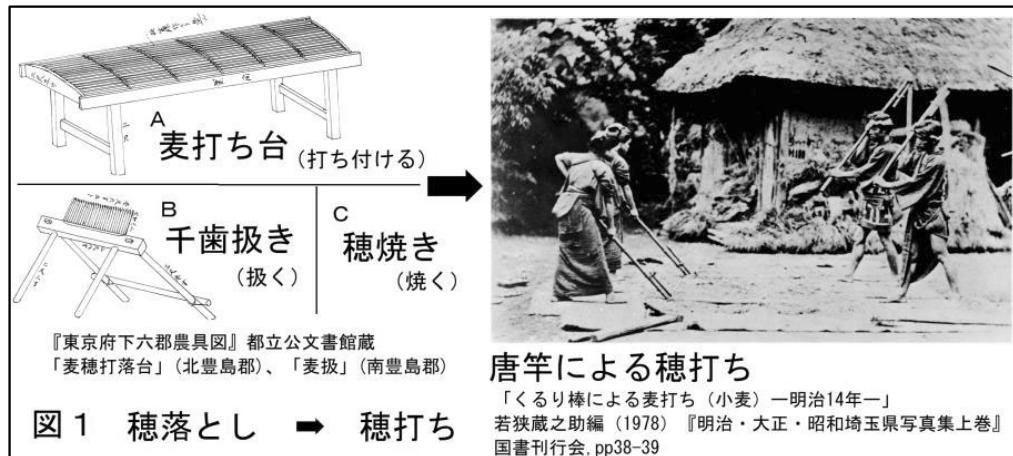


図1 穂落とし → 穂打ち

びついた作業名称が見られる。これらの中でも、▲ボウウチ（ボウブチ）・△ボウチや、★ムギウチ（ムギブチ）が広範囲に分布しているが、県西から県南東部までの間に●ムギオシ（図中の線）が点在し、県南東部を中心に■ノゲオシ・□ノガオシ（図中の囲い）がある。

・事例9 ムギオシ さいたま市（旧浦和市） 割って干した麦は庭に運び麦打ちばしごに打ちつけ穂をもぎ取る。これを麦打ちといい、全部の麦を打ち終るまでしまっておく。麦打ちが全部終ると、打ち終えた穂を庭一面に拡げて（土の上に直接）午前中は干しておき、午後クルリ棒で麦を押して一粒一粒の麦にする。このとき、いっしょにノゲを取る。これを麦押しという。（浦和市〈1978〉『浦和市史調査報告書第5集』p.35）

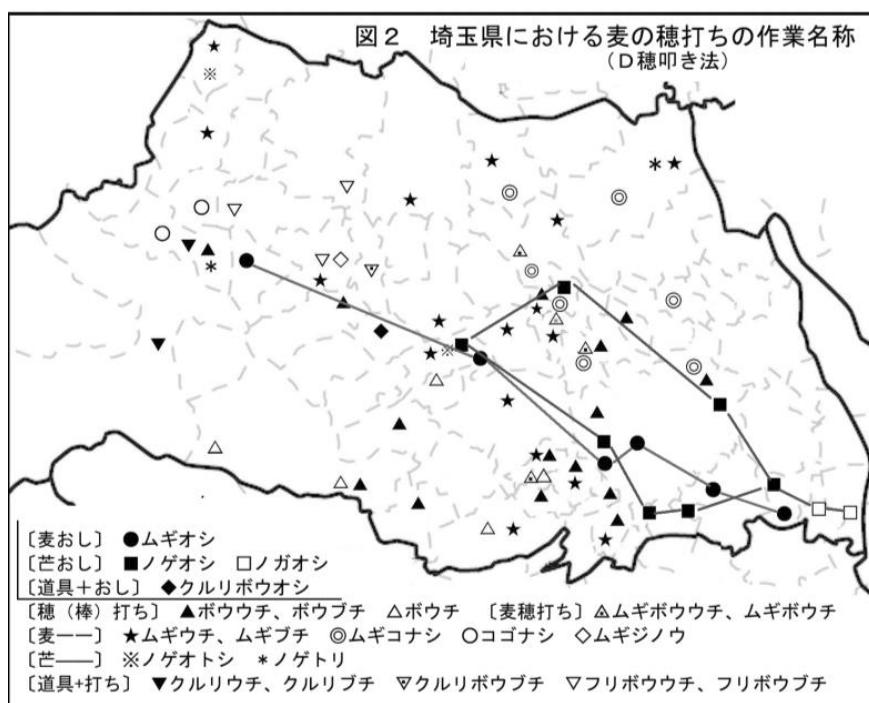
ここでは、「麦打ち」はむしろ麦打ち台に打ち付けの作業であり、その後の唐竿による穂打ちを「麦押し」といった。

穂打ちは、①麦を粒にし、②芒を取るものであり、ムギオシとノゲオシは、①脱粒+②脱芒という一体化した作業を表す表裏の名称であった。

さて報告者は、話者のことばを拾って「クルリ棒で麦を押して」と記述している。このような例は、ほかにもある。

・事例10 川口市 クルリボウは、数人が向かい合って交互に打つ。これを「クルリボウでおす」といい（下略）。（川口市〈1980〉『川口市史民俗編』p.372）

・事例11 志木市 くるり棒・ボーチ・のげ棒などで打って脱穀するが、これをオス（押す）と



いう。(志木市 (1985)『志木市史民俗資料編 I』 p. 445)

・事例 12 坂戸市 コキや輪転機で脱穀できなかつた分は、ムシロの上に置き、クルリボウで叩いた。クルリボウで叩くことを「おす」という。(坂戸市教育委員会 (1991)『坂戸市の民俗 1 横沼の民俗』 p. 36)

・事例 13 春日部市 クルリ棒でたたいて(たたくことをオスともいう)脱穀した。(春日部市 (1978)『春日部市史第5巻民俗編』 p. 171)

以上は、報告者あるいは地元の人々のことばへの違和感から記録されたものであろう。

以下は、話者自身のことばに近いものが記録された例である。

・事例 14 1982 年さいたま市 (旧浦和市道場) の明治 26 年生まれの女性の聞き書き

麦打ちくれえつらいこたなかつた。(中略) そこの庭へこのくれえいっぱい干しといて、それでそれを片っぱしからクルリ棒で押すでしよう。熱いうちでなくちゃ落ちねえだから、まったくそらあ大変だつたね。それから、それを押して細かくしちゃうと、晩方になってから唐箕であおるでしよう。それがチクチクチクチク。(浦和市 (1982)『浦和市史調査報告書第 14 集』 p. 276)

唐竿で「打ったか」という質問に対し、「打つ」から「押す」「押し」に変わっている。麦打ちの際、素肌や着物につく芒のつらさは、次の事例では嫁の苦労話として語られている。

・事例 15 1988or1991 年 鶴ヶ島市大田ヶ谷 明治 32 年生まれの女性の聞き書き

嫁なんかは最後でなくちゃお湯(風呂)は入れてもらえねえんだよな。それも、麦刈って、そいつを車いっぱい扱いて、汗流して、麦にはクルリ棒押すんだろお。モンペなんかなかつたから腰巻きでもつてな。でもつて、麦にやあとげがあるからな。お湯に入りてえけど、それでもお湯へなんかは一二時ぐらいまでは入れねえ。(鶴ヶ島町 (1992)『鶴ヶ島町史民俗社会編』 p. 437)

報告者が意識せず記述したものからも、唐竿が「おす」ものであったことがうかがえる。

・事例 16 1980 年代 くるり棒で麦を打つ作業は暑い盛りで汗が出るし、麦のノゲが飛んで来るので大変骨の折れる仕事であった。そのため、「おさねえでもいいから歌わねえかい」などといつて人を呼んで麦打ち歌を歌いながら打ったところもある。(大館勝治・柳正博 (1985)「文字で綴る麦作りとその用具」埼玉県立歴史資料館編『麦作りとその用具 埼玉西北部を中心に』同館、p. 166)

このように埼玉県の一部では、唐竿によって打つことを「おす」といい、麦の穂打ちをムギオシ、ノゲオシなどといっていた。

さて、これが「荒稻を搗く事を糲を押す」と、どう関わるのだろうか。

2-2 穂搗き・足踏みとしての関東の麦おし、芒おし

麦の脱穀というと、以上のような唐竿による麦の穂打ちが思い浮かべられることが多い。しかし実際には、麦を臼と杵で搗いたり、足で踏んだりすることもあり、それもムギオシ、ノゲオシといい、コオシ、ツノオシなどともいった⁹。

・事例 17 コオシ さいたま市 (旧浦和市) 麦押しが全部済むとムシロの上に拵げて干す。そして乾いたものを二斗ばかりのつき臼でついて完全にノゲを取る。これをコ押しという。(浦和市 (1978)『浦和市史調査報告書第 5 集』 p. 35)

コオシは、ムギオシ(唐竿の穂打ち)に対して、臼・杵でその後処理(脱芒を徹底する追加作業)をしたものと理解される¹⁰。これを足踏みで行う例もある。



図 3 臼・杵による穂搗き

「臼によるのげとり」
若狭蔵之助編 (1978)『明治・大正・昭和埼玉県写真集上巻』国書刊行会, pp38-39

・事例 18 ノゲオシ 上尾市 ボウウチが済んでもノゲが落ちていないものが2パーセントほど残るが、ノゲを取るため、四斗桶にザル（1斗5升ザル）一杯入れ、桶の中に裸足で入ってこれを踏むと、5分程度でノゲが落ちた。これをノゲオシという。

(上尾市〈2002〉『上尾市史第10巻別編3』p. 164)

関東の麦の脱穀では、図4¹¹のように、脱粒と脱芒の工程（二次脱穀）は、唐竿による穗打ち（D）の後処理・追加作業（脱芒の徹底）として、臼・杵で搗いたり（E）、足踏みしたり（F）することがあり、小規模作業で唐竿を用いず、臼・杵だけが用いられることもあった¹²。

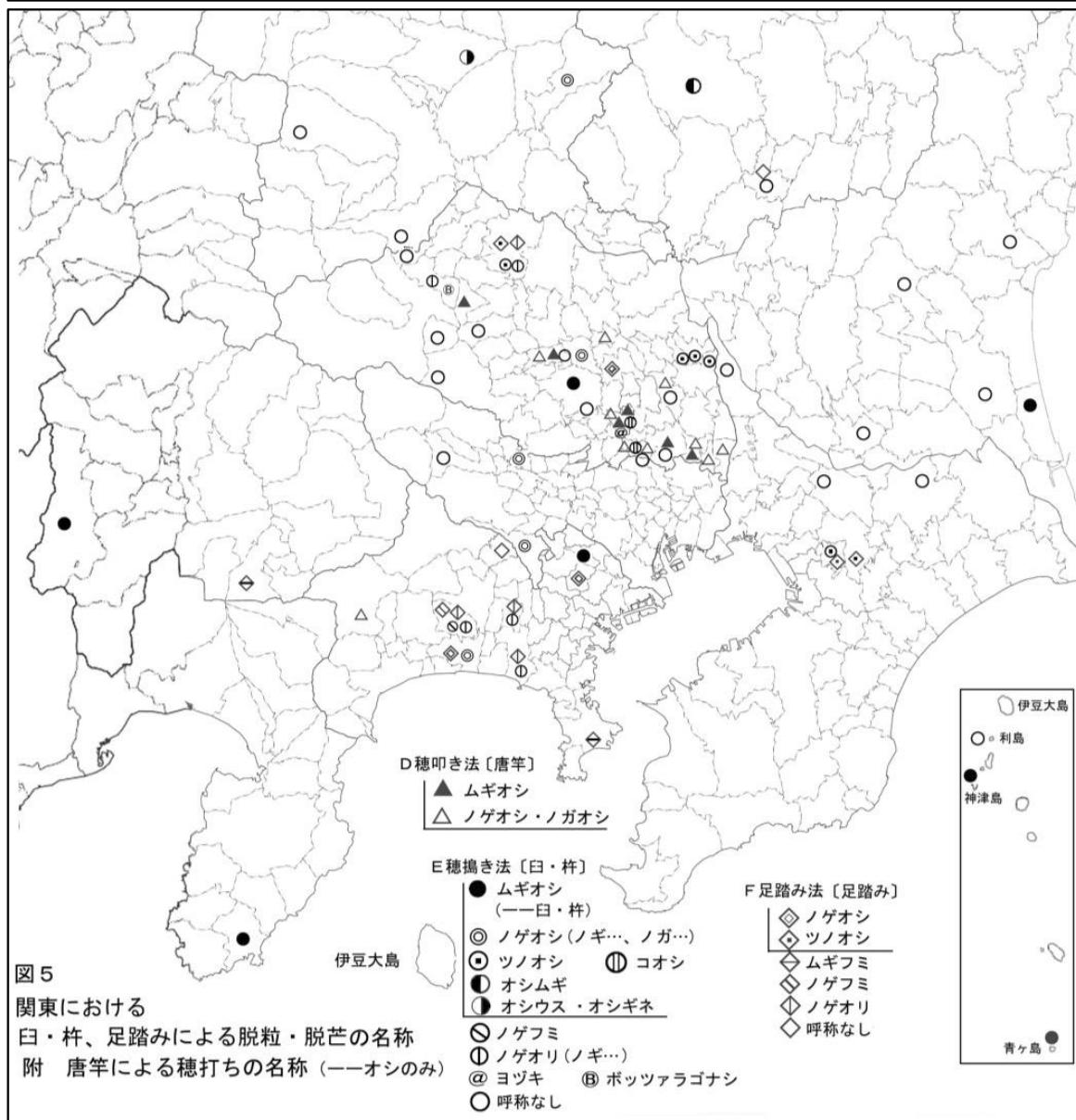
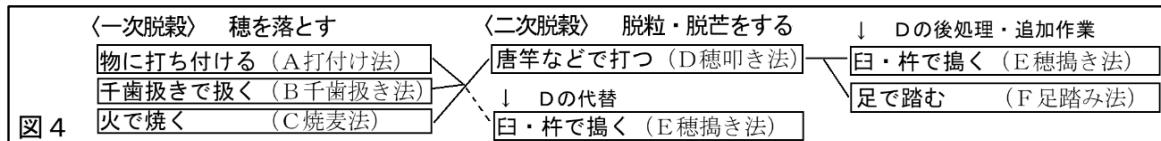


図5に、関東の臼・杵や足踏みの作業の存在が確認できた範囲で、作業名称（ムギオシ等など道具名称を含む）の分布を表した¹³。○印は臼・杵、◇印は足踏みの作業を示す。

芒と「おし」とが結びついたノゲオシ、ツノオシや、ムギオシに対するコオシ（事例 17）がある一方、麦や芒に「踏み」「折り」などが結びついたムギフミ、ノゲフミ、ノゲオリなどの名称がある。この中、●ムギオシは、東は茨城県鹿嶋市、西は山梨県南巨摩郡早川町奈良田、南は東京・青ヶ島というように、より広く点在している。北の栃木・群馬には、オシムギ（作業名称）、オシウス・オシギネ（道具名称）がある。

比較のために▲△で唐竿による穂打ちのムギオシ、ノゲオシを付してみた。ムギオシ、ノゲオシは、埼玉では△唐竿の作業であったが、関東全体では○臼・杵や◇足踏みの作業であった。

では、これらの作業がどんなもので、なぜ「おす」だったのか、見てみたい。

まず足踏みは、「両足を堅臼の中に入れて芋をもむように」（深谷市）、「左右の足をすり付けるようにして」（平塚市）踏むもの、「足で揉」む（四街道市）ものであった。

一方、臼・杵の作業は、餅搗きのように杵を高く振り上げるのではなく、図3のように、左手で杵の柄を持って腰のあたりに据え、右手で杵側を持った。そして「杵をねじりながら」（武藏村山市）、「杵でこづいて」（成田市）、「杵でこする」（四街道市）、「餅をこねる様に」（鹿嶋市）、「軽く搗く」（皆野町）ものであった。これは、餅搗きを始める前、餅米を練る作業に似ている。杵を落下させて打撃するよりも、むしろ対象に接触したまま、杵の重さを利用しつつ力を加えることに重点がある。これはまさに「おす」ものであったといえよう。

手元から前方に、上から下に向かって力を加えることによって、形ある手ごたえあるものに物理的な負荷をかけることが「おす」¹⁴と理解される。元来「おす」は、臼と杵のように実際の動作の表現であったが、唐竿など「打つ」道具の場合にも流用され、麦の脱粒・脱芒作業はおしなべてムギオシ（またはノゲオシ）と呼称されてきた。ただ、他方では「打つ」（図2穂打ち。ボウウチ、ムギウチ）、「踏む」（図5足踏み。ムギフミ、ノゲフミ）など、実際の動作に即した名称も用いられた。また、「おす」は主体の働きかけのみを意味するが、「取る」「落とす」（図2穂打ち。ノゲトリ、ノゲオトリ）など、「おす」ことで生ずる結果を示す名称も用いられた。そうした中で、近代には「おす」の領域は狭まり、ムギオシ、ノゲオシや、「クルリボウでおす」「杵でおす」というところに、その名残をとどめてきたのではないだろうか。

3 東北の糲おし、芒おし

稻の脱穀を一般に「稻扱き」ともいが、扱いた後には、糲がついたままの穂切れを処理（脱粒）し、有芒種稻の芒を折る（脱芒）ため、「麦打ち」ならぬ「糲打ち」が行われた。

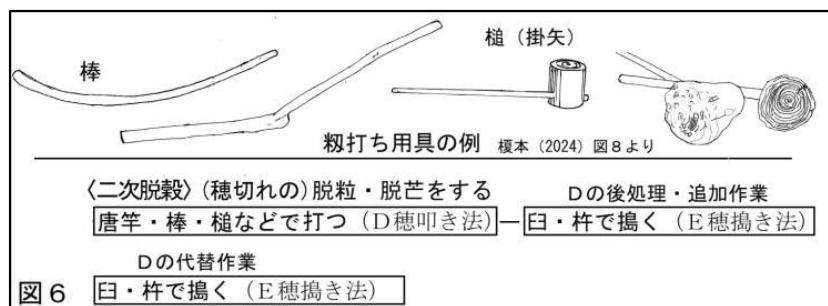


図6のとおり、稻の場合も、唐竿で打つ（D）こと、臼・杵で搗く（E）ことは、麦と共に通っていた。ただ、東北には必ずしも唐竿は普及せず、穂打ち（D）には棒¹⁵や槌（掛矢）も用いられた。

東北では、「糲打ち」は「糲おし」に類する名称で呼ばれていた。青森・岩手の南部地方では、扱いただけの糲をクサモミといい、それが処理（「糲おし」）を経ることでオシモミと呼ばれた¹⁶。

・事例 19 昔のイネの品種はイガがついていたので、脱穀した糲は臼に入れ、キギ（縦杵）で軽くオシテ（搗いて）落とした。（中略）糲が枝付き状になっているものもオシ（下略）。

（むつ市 青森県（2003）『下北半島西通りの民俗（青森県史叢書）』）。

ここにきて、「荒稻を搗ク事を粉を押ス」とは、棒、槌、唐竿など多様な道具や動作を表す穀物脱穀の「おす」のうち、臼と杵という、もっとも基本的な例を述べたものと捉えられよう。

図7に、東北の糀打ち作業や用具における「糀おし」に類する名称のみの分布を、市町村ごとに示した¹⁷。記号で示したもののが糀に関する名称、カタカナは麦や雑穀などの名称である。

青森県には、●モミオシ
が広く見られる。

岩手県には少ないが、
麦・粟・稗・蕎麦にそれぞれ「おし」名称(ム・ア・ヒ・ソ)があり、ノゲオシ(◎:稗、ノ:麦)が見られる。

宮城県では、槌状の道具名と結びついて□アオオシ（アオでおす）という。県南部には▽モミヨシ、▼モミヨスがある。

秋田県はモミオシが多く、ノゲオシも見られる。

山形県には、モミヨシ、モミヨスなどがある¹⁸。

福島県では、北・西部に
▲モミヨウシが、山形県寄
りにモミヨシがある。

資料不十分ながら、この図からは、青森・秋田はモミオシが色濃く、岩手・宮城など太平洋側はやや薄く、山形・福島では語音が変化している¹⁹とみえる。

語音の違いについては、貞享元年（1684）の『会津農書』に記述がある。



・事例20 上巻『会津農書』上巻「稻扱并粒立」

扱たる穂を細腰杵〈テキネ〉を以よふし。(訳 扱いた穂を手杵で搗いて芒をとり)

(農山漁村文化協会〈1982〉『日本農書19 会津農書 会津農書附録』〈著者：佐瀬与次右衛門, 翻刻・現代語訳・解題：庄司吉之助 注記：長谷川吉次〉, pp. 77-78)

ここでは、「よゑ」が、糸を堅杵で撗いて「芒をと」ること（脱芒）と解釈されている。

・事例21 庄之春 『会津農書』下巻「農人郷談」

庄 ヨウフヘ 禾穀 芒麦等ノ餌ツキ。是關東ニテハ庄之春トスル也。

(説 庄 玄のある糀 茅のある麦などの芒搗きのことで、関東ではこれをおしの春(つき)という)

(農山漁村文化協会 (1982) pp. 215–216)

脱芒は、麦と稻に共通するめんどうな課題であった。芒のある穀や麦(粒)を搗くことを、関東では「圧之春(つき)」、会津では「圧(ヨウフヘ)²⁰または「よふし」という。近世の早い時点で、すでに関東の「おし」と会津の「ようし」とは分かれていたのである。

4 おわりに

大正時代以降、「麦押唄」などが記録される一方、人々の日常会話の中の「おす」「おし」は減っていったと推測される。特に「麦おし」は、大正末から昭和初めにかけて大麦の調製法である「押麦」が普及したことから、紛らわしい「俗語」として、なおさら使われなくなっていたのだろう。これを証明することは困難であるが、実際に混乱を生じた例はある。

・事例 21 麦おしは押麦を作る作業?

麦おし唄 宮城県栗原郡若柳町(収録年月日: 1974年10月15日) 「麦おし」は押麦を作る作業。
(中略) 歌詞は七五七五とやや古風だが、この作業というよりは麦打唄の歌詞をそのままうたっているようだ。(日本放送協会 <1992>『復刻日本民謡大観 東北篇—現地録音CD 解説』P. 53)

1974年に録音された「麦おし唄」が、1992年に公開される際には押麦の唄とされている。

昭和10年代以降、動力脱穀機の普及や稻の品種改良(無芒化)によって脱粒・脱芒が不要となり、「糲おし」「麦おし」の作業は農村の日常から消えた。都市化の進行とともに、農村の生活文化に関心が向けられる中で、稻と麦を中心とした脱穀の「おす」「おし」の事例が、各地でひつそりと記録されていった。その一方、平成から令和にかけて、昭和10年頃までの農作業を経験した人々は鬼籍に入り、「おす」「おし」は人々の記憶から失われていったと考えられる。

¹ 榎本(2023)「『おす』と表現される東日本の穀物脱穀」『埼玉大学紀要(教養学部)』59-1, pp. 143-161

² 「民俗・民間伝承の個々の事象を表示する語彙。方言語彙の一部」。柳田國男監修『民俗学辞典』(1951) p. 593

³ 「いにしへはうすづくこともあらでたゞおし揉(モミ)ぬ、さるよしもてあらしねを糲(モミ)とはいふなり」と続く。真澄は、秋田県横手市・保呂羽山の参詣者が裸で「押合」ことや、鹿角市八幡平小豆沢「大日堂舞楽」の踊り「もみおし」に注目する。裸でもみ合うことから発想し、素手で押し揉むことを「糲」の語源であると推測したと考えられる。

⁴ 「糲のままの米の意か。もみごめ」「あらしね」【荒稻】『日本国語大辞典第1巻』(第2版) p. 619

⁵ ここでは糠を取っているので、脱穀(穂から穀をはずす)というより、脱稃(穀から糲殻をむく)の作業である。

⁶ 榎本(2023)「埼玉県の麦脱穀と『麦押唄』」『西郊民俗』262, pp. 22-27, 西郊民俗談話会

⁷ 『日本国語大辞典第12巻』第2版(2001) 小学館, pp. 909-910

⁸ 榎本(2023)「埼玉県における麦脱穀の作業呼称とその機能」『埼玉民俗』48, 埼玉民俗の会, p. 30の図4を修正。

⁹ 麦の脱稃はムギツキといって、麦の脱穀のムギオシと区別している。

¹⁰ 旧浦和市内では、ムギウチ(打ち付ける)、ムギオシ(穂打ち)、コオシ(臼・杵で搗く)という組み合わせであった。

¹¹ 小川直之(1993)「日本の脱穀具と脱穀法」『府中市農具展 農具は語る多摩の近代』府中市教育委員会, pp. 19-43による。

¹² 榎本(2023)「麦打ちの後処理または代替としての『麦おし』」『西郊民俗』263, pp. 1-14。雨天に臼と杵が用いられた記述は日記にもある。明治29年7月7日「内ノ者ニ而雨天引続ニ付無拠家の中ニ而麦ヲおす」、明治42年6月27日「不止め、無拠仕事、臼麦押、麦小麦畑ニ而生初ル」。八王子市郷土資料館編『石川日記』(1~15巻), 八王子市教育委員会, 1977~1993。

[明治29年] 14巻(1992) p. 42, 109, [明治42年] 15巻(1993) p. 146

¹³ 榎本(2024)「語彙からみる稻と麦の2次脱穀」『民具研究』186, 日本民具学会, p. 42の図4を補充・修正。

¹⁴ 「おす」【押・圧・推】『日本国語大辞典第2巻』第2版(2001) p. 1166、同『同 第3巻』初版(1973) p. 594

¹⁵ 弹力ある根曲がりの自然木。モミブチボウ、タタキボウ、カラミボウ、ソソロボウ、シナイボウ、シナイなどという。

¹⁶ 能田多代子(1982)『青森県五戸語彙』国書刊行会, p. 34, 62

¹⁷ 榎本(2024)「語彙からみる稻と麦の2次脱穀」p. 46の図7を補充・修正。

¹⁸ 山形県方言研究会(1970)『山形県方言辞典』は、「ヨス」に「叩く。なぐる」の意味があるとする(p. 645)。

¹⁹ 関東にはモミウチはあるがモミオシはほぼなく、ツタッカ(穂切れ)オシ、ノゲオシなど、より具体的な内容をいう。

²⁰ 久野俊彦氏によると、「ス」を「フヘ」と誤読する例があることから、「ヨウフヘ」は「ヨウス」である可能性もある。

方言(山中弁)と古典隨筆(枕草子)

発表者 池上 弥
いけがみ わたる

Wataru.ikegami0@gmail.com

1. 研究の目的と略歴

[目的] 発表者の生まれ故郷である山中温泉の観光振興に資することを研究活動の目的としていました。地元の方言「山中弁」で、よく知られている古典を訳し観光客と地元の方々に広めることを試みました。

[略歴] 退職（2010年）を機に、自分史や生まれ故郷の山中温泉を題材としたエッセイを発表。2020年からのコロナ禍の3年間は、古典隨筆（主として枕草子）の山中弁訳に取り組む。2023年初夏、亡父池上宏との共著「山中温泉界隈の伝承ばなしと山中ことば古典三大隨筆」を発表し、古典隨筆有名段の方言訳（山中弁）を世に問うという挑戦をしました。

2. 研究活動の成果物

古典三大隨筆（徒然草、方丈記、枕草子）の有名段の方言訳を、別途編纂した地元の伝承ばなしと併せて2部構成の読本にして発表しました。

方言訳の収録内訳

三大隨筆冒頭文 全文

徒然草 有名文4段

方丈記 有名文3段

枕草子 有名文5段

（枕草子は、全部で50段を翻訳、
内5段を読本に採択）



3. 古典の方言訳というテーマ選択と新たな試み

[テーマ選択]

- 未開拓分野であり、先例があまり見られない。扱う題材は古くても、取り組みには、新鮮さが感じられる魅力がある。
- 方言により、古典のおもしろみを引き出すことができる。
- 古典の魅力の再発見と同時に、方言（山中ことば）の価値を再発見できる。
- 古典に親しむことにより、インテリジェンスを刺激する。
→知的な遊びに繋がる。
- 方言は楽しめるものであることを知ってもらうため、だれでも知っている有名な文を訳すべきと考え、古典三大隨筆（主として枕草子）を、翻訳の対象に選びました。

[新たな試み] “なじまないものとの格闘”

- もともと古典と方言はなじまないものとされてきました。
- 古典は「書き言葉」、方言は「話し言葉」のため、親和性がないのです。
- そのせいもあってか、古典の方言訳はほとんど先例がありません。
- 加えて今では、古典、方言ともに親しみにくいものとされています。
- こういった負の状況をブレークスルーし、古典と方言をより身近に感じてもらえるようにと、古典の方言訳をとらえ直すという、新たな試みに挑戦しました。

4. 観光振興への貢献

- 研究活動の主たる狙いに、山中温泉の観光振興への貢献を掲げていました。
- 山中ことばのおもしろみを追求する理由は、地元のことば（方言）はいつでも観光客の関心の的であったからだといえます。
- 観光客と女将・仲居さんの会話の中心は、地元の言葉であり、これが地元の文化への関心を呼び起こしてきました。

- 方言は観光資源といえる →光をあてれば、観光振興への貢献ができると確信しました。
- 観光客にもよく知られた山中ことばもあり、S30年代には次表のようなランキングが、流布したことありました。

No	山中ことば	標準語	英語
1	にやあにやあ	娘さん	Young Girl
2	えちやけな	可愛い	Cute
3	おんぼらーと	リラックスして	Comfortably
4	やつす	おしゃれする	Dress-up
5	きのどくな	ありがとう	Thank you

5. 人気難解ことばTOP10と英語訳

- インバウンドの増加に伴い、山中ことばを外国人に説明する機会もふえました。外国人にとっては、日本語のできる人であっても、標準語訳より英語訳のほうがわかりやすい場合があるとの声があります。
- それに応え、英語訳を提示するプロジェクトが、姉妹プロジェクトとして別途進行中です。「山中ことば100選」が発表されています。

No	山中ことば	標準語	英語
1	めっこめざらし	あらいざらい	Everything
2	まんぶ	トンネル	Tunnel
3	ほたえる	喚く	Shout
4	はすわな	気前の良い	Generous
5	はいだるい	のろまな	Slow
6	どくしょもない	とんでもない	Terrible
7	てなわん	てに負えない	Beyond control
8	じらくさい	焦らすような	Irritating
9	さらいつける	やっつける	Get through with
10	かさだかな	おおげさな	Exaggerated

6. 三大隨筆冒頭文を方言訳で読む

(1) 徒然草

(原文)

つれづれなるままに
日暮らし 砥にむかひて
心にうつりゆく よしなしごとを
そこはかとなく 書きつくれば
あやしうこそ ものぐるほしけれ

(方言訳)

なんもすることがねーと
あいそみねーし
一日ず~と硯に向こうて
心の中に浮んでは消えてってしもう
どーでもえーことを
あてものう書きつけたりしとると
思わんと熱が入ってきて
きがおかしゅうなってまうような
気分になるんや

(2) 方丈記

(原文)

ゆく河の流れは絶えずして
しかももとの水にあらず
よどみに浮ぶうたかたは
かつ消えかつ結びて
久しくとどまりたるためしなし
世の中にある人とすみかと、
またかくの如し

(方言訳)

流れ過ぎていく河のながれはンね
途絶えることがないんやけど
そーかちゅてその水はモトの水や
ないわいね
河の水がたまつるとこで
浮んどるあぶくは
消えてなくなったり
形が出来たりして
長いことそのまんまでおるちゅう
ことはないもんや
この世に生きとる人とその人の
住むところちゅうもんは、
こんなんとおんなじで
なんともはかないものやないけ

(3) 枕草子

(原文)

春はあけぼの。
やうやう白くなりゆく、
山ぎわはすこしあかりて、
むらさきだちたる雲の
ほそくたなびきたる。

(方言訳)

春やったらあけぼのが一番やね。
空がゆっくり白うなっていってえ、
山の端っこがちょっとこし
あかるうなってえ
紫の雲が
ほそーたなびいているのなんか
なんともいえんわね。

7. 方言（読本）の普及活動

(1) 公共施設での読本の閲覧

現在下記の6か所の図書館の蔵書として、閲覧に供してもらっています。

- ① 神奈川県立図書館
- ② 横浜市立中央図書館
- ③ 石川県立図書館
- ④ 金沢市立玉川図書館
- ⑤ 加賀市立中央図書館
- ⑥ 加賀市山中図書館

(2) ホームページの開設

Yamanaka-onsen.jimdosite.com

8. 翻訳期間と執筆施設

- 方言訳の作業は、コロナ禍で巣ごもりの3年の間にわたって行いました
- この間、週に3日横浜紅葉坂の神奈川県立図書館に通い、執筆活動に励みました。
- この図書館は非常に恵まれた環境であり、執筆活動には欠かせないものでした。

9. 参考図書の活用

- 方言訳の正確性を担保するため、複数の先人たちの古典の現代語訳を参考しました。
- とくに、橋本治氏の「桃尻語訳 枕草子」は大いに参考になりました。

10. 方言訳の課題

- 方言は「話し言葉」で古典は「書き言葉」であるため、両者の親和性はありません。とくに、「雅ことば」の扱いは難しく、参考文献も見当たらぬいため、わたしの作品には独断の言葉遣いが多々あることは否めません。さらに研究の余地があるとおもわれます。

11. 雅ことばの扱い・・・ケーススタディ

- 「雅ことば」の方言訳では、かなり無理をしています。標準語では翻訳ができるても、山中弁には翻訳できないということは、山中弁には雅の要素がないかもしれません。これについては、さらに研究を進めたいと考えています。

雅ことばの例

正月一日は、まいて、空の景色うらうらと珍しく、
かすみこめたるに、世にありとある人は、
姿容心ことにつくろい、
君をもわが身をも
祝ひなどしたるさま、ことにをかし

(翻訳のポイント)

- ① めづらしい形容詞・副詞→まいて、うらうらと
- ② 独特の敬語表現→・・・したるさま
- ③ リズミカルな語調
- ④ 空白を読ますレイアウト

方言訳の例

正月一日はとくべつ！ 空の景色はウラウラといつもと違ごう感じで、
霞がかつたりしとるうえに、世の中の人はみんな
着るものやお化粧にがっぱ気入れて身をやつしとんなる。
ほんで、みかどのこともじぶんのこともお祝いしとんなるんやけど、
その様子はてんぱにイケてます。

(方言訳の評価)

- ① まいて、うらうらとにぴったりくる訳語がない
- ② 敬語は“・・・しとんなる”と訳したが、どこか田舎臭く、雅の感じが出ていない。
- ③ 全体的に、リズムと空白の良さを、表し切れていない

12. まとめ

- 古典の方言訳は先例もなく難しいのですが、得るものはあります。それは、地元の人に大変喜ばれることです。観光振興に劣らない果実といえるでしょう。
- 方言の保存・普及には工夫がいります。たとえば、継続するキャンペーン、クイズ大会などのイベントが効果的と思われます。
- 方言は「話し言葉」、古典は「書き言葉」であるから、両者はなじまない、親和性がないといえます。翻訳技術の問われるところです。
- 「雅ことば」の扱いは難しく、標準語訳はできても、方言訳は困難ではないかと思えます。さけられない困難のような気がします。

意志表現の選好の地域差

—申し出表現に「手伝う？」が使われる理由—

船木礼子¹

1 申し出表現の「手伝う？」は受け入れられるか

近年、申し出表現として「手伝う？」の使用が見かけられるようになった。

- (1) (風間課長と石沢が話していると、敵対する鬼戸課長が現れる)

鬼戸：「おやおや大変そうだねえ 何か手伝うかい？」

(吉谷光平 2020『新装版 今どきの若いモンは3』小学館, p.6)

- (2) (英語話者の質問に対する日本語母語話者からのアドバイス)

Q : Question about Japanese

How do you say this in Japanese? Do you need help with anything Casual way

(中略)

A : なにか手伝う？ 大丈夫？ といえば親切な感じがします

(HiNative, 16 Jun 2021, <https://hinative.com/questions/19327517>, 表記は一部改編)

- (3) その日、わたしの方が夫よりも帰宅が遅く、料理好きの彼は二人暮らしをしていた時と同じように夕食を作っていた。帰ってきたわたしが、「わあ、美味しそうだね！なんか手伝う？」、「大丈夫だよー」という会話を交わしていると、(以下略)

(1+1+1, note, 2023年5月, <https://note.com/vida111/n/nfcdd936e7a25>)

これらから、申し出表現としての「手伝う（かい）？」に違和感をもたない日本語話者が一定数いるといえる。しかし、発表者にとって「申し出」の自然な表現は、「テツダオー」などのウ／ヨウ形（意志形）、これに疑問の終助詞「カ」が付いたもの、あるいは「テツダウヨ」のように動詞終止形（非過去形）に終助詞が付いたものなどだ（丁寧表現や与益表現も加えられる）。運用的には義務表現や使役の命令表現などでも申し出を表せるが、動詞終止形で相手に尋ねる「テツダウ？」や「テツダウカイ？」は不自然に感じる。

本発表では、こうした申し出表現に用いられる形式のうち、特に意志表現の形式に注目して、語用論的な選好（preference）の地域差をFPJDデータで可視化していく。

2 申し出表現と意志表現

森（2014: 254）は仁田（1991）をふまえ、申し出表現は話し手が当該の発話によって“話し手が聞き手に利益をもたらす行為を行う”ことを述べる表現であり、日本語では申し出表現は意志を表す表現によって行われると定義している。そこで本発表の関心から、「意志を表す表現」に当たる動詞終止形（非過去形）やウ／ヨウ形などの諸形式と、その疑問化

¹ ふなき れいこ（神戸女子大学）

形を考察の対象とすることにする。

方言の申し出表現については、授受表現の使われ方や言語行動の機能的分析が行われてきた（沖 2009, 小林・澤村 2014, 松田 2021 など）。小林・澤村（2014: 124-127）では、『方言文法全国地図』第 6 集、第 320 図（「(荷物を) 持ちましょう」B 場面）の略図を示し、「持つ」の地域は東北・九州・沖縄と東西方言の境界地域だと指摘している。ただし、授受表現の有無に注目している略図なので、「持つ」には「モツ」「モッガ」などだけでなく、「モツベー」「モタズカエー」「モトーカナ」などの形式も含まれている点に注意が必要である。

沖（2007）は 意志表現について『方言文法全国地図』第 3 集の 106 図から 111 図を使い、「オキルカ」「オキズカナ」「オギベガナ」などの「～か型」の表現法をとる地域と、「オキヨー」「オキュー」「オキロー」などの「非～か型」の地域があることを指摘している。「～か型」は、長野県全域を含む東日本にところどころ固まりながら、あるいは分散しつつ分布し、「非～か型」は西日本のほぼ全域であるという（沖 2007: 181）。そこで本発表では動詞終止形とその疑問形、意志形とその疑問形を分けて扱うこととする。

3 意志表現形式の運用の地域差

申し出表現を構成する意志表現の形式について、全国方言分布調査（以下 FPJD）のデータおよび大西編（2016）の 127 図「行こう（意志・独話）」と 128 図「行こう（意志・対話）」で確認する。調査で回答された語は語用論的な選好（preference）の地域差を反映している可能性があることに注意しながら見ていく。FPJD の質問文は以下の通りである。

- (4) 127 図「行こう（意志・独話）」（質問番号 G-090「行こう」（独話））
買物にいかなければならないことを、思い出しました。時間的にも間に合いそうです。そうしよう、という気持ちで、「さあ、買物に行こう」とつぶやくとき、どう言いますか。
- (5) 128 図「行こう（意志・対話）」（質問番号 G-091「行こう」（対話））
友達から旅行に行くよう促されて、だんだん行く気になってきました。そこで話し相手に対して「それじゃ、行こう」などのように、自分が行くつもりになっていることを伝えるとき、どのように言いますか。

図 1 と図 2 は、回答形式を併用も含めて延べ語数として数え、地域ごとに使用形式の割合を示したものだ²。これらの図では、秋田県由利地方と山形県庄内地方は意志表現に「べー」を用いないので新潟県や北陸地方とまとめている。「イカズ」を使う山梨県・長野県・静岡県もまとめ、ここに北部伊豆諸島（伊豆大島・御蔵島）の結果を加えている。鹿児島県の種子島と屋久島は九州とし、奄美大島や喜界島以南は琉球とした。なお、八丈島と青ヶ島、南大東島の回答は集計に含めていない。形式の分類は、例えば動詞終止形の「イク」やこ

² 各地域の回答の延べ語数は次の通り。

図1: 北海道 30, 東北 99, 関東 71, 山梨・長野・静岡・北部伊豆諸島 54, 愛知・岐阜・三重 54, 由利・庄内・新潟・北陸 62, 近畿 61, 中四国 105, 九州 92, 琉球 35。

図2: 北海道 30, 東北 89, 関東 75, 山梨・長野・静岡・北部伊豆諸島 56, 愛知・岐阜・三重 50, 由利・庄内・新潟・北陸 67, 近畿 68, 中四国 117, 九州 88, 琉球 37。

図1 『新日本言語地図』127図（意志・独話）の使用形式

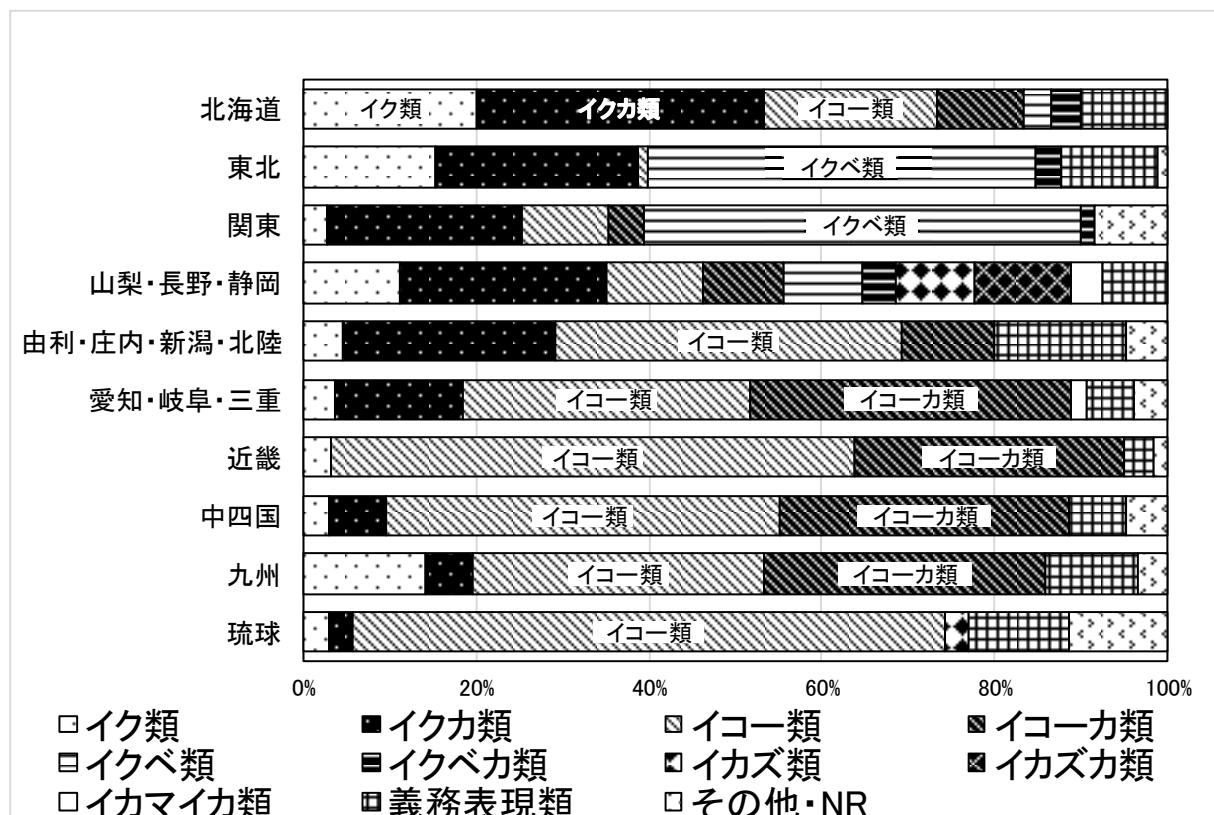
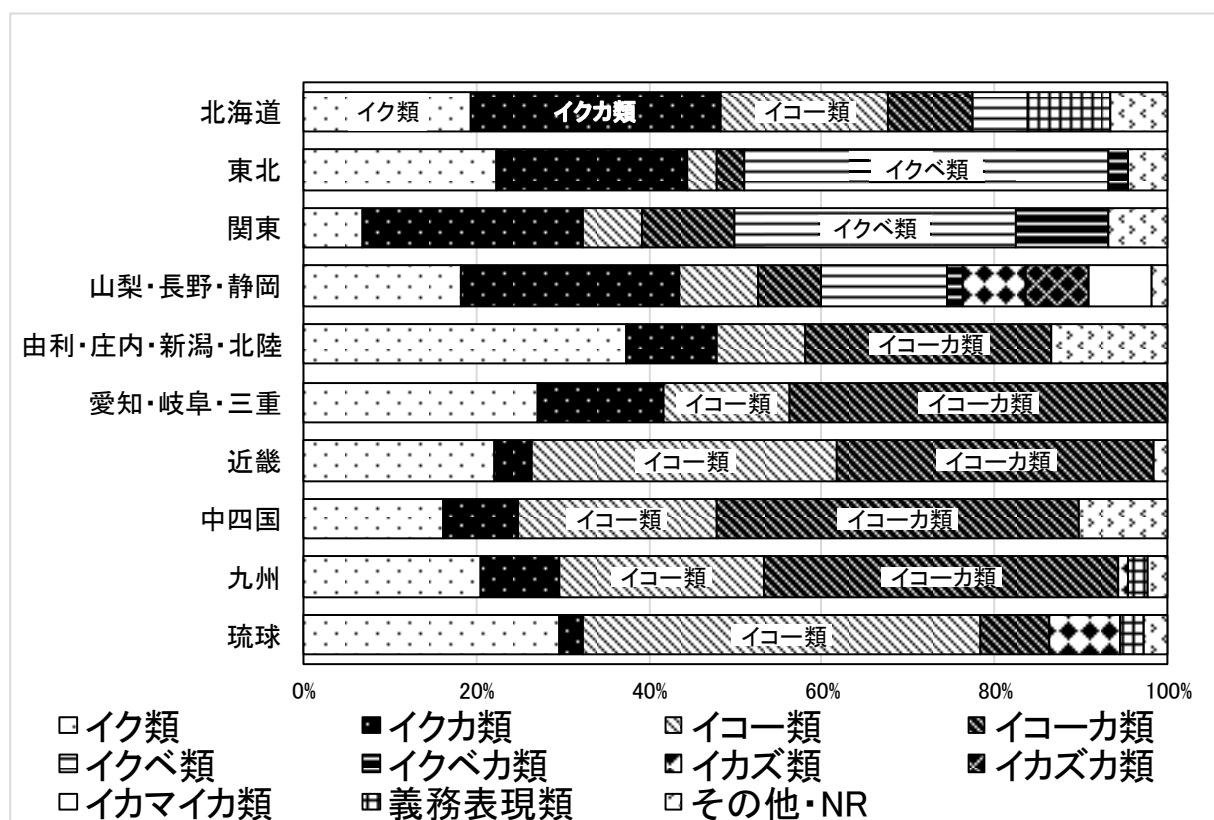


図2 『新日本言語地図』128図（意志・対話）の使用形式



れに終助詞の付いた「イクゾ」「イクワ」などをイク類とし、動詞終止形に「カ」が付いた「イクカ」「イッカナ」などをイクカ類として、「非～か型」と「～か型」を対比できるようしている。なお、「イカ一」や「イコラ」は動詞未然形+ウと見なしてイコ一類とした。平良市の [ikaddiciba]、伊良部町の [ikadʒi]、多良間村の [ikazi:] はイカズ類とした。

図1と図2から、「～か型」は全国に見られるが、中部地方を境に東西で傾向の異なることがわかる。西日本はウ／ヨウによる意志形式「イコ一」「イカ一」が主として用いられ、その「～か型」の「イコーカ」「イカッカ」などが併用されている。西日本では動詞終止形の回答は少なく、独り言である図1では東日本との違いが顕著である。特に近畿地方ではイクカ類の回答は図1（独話）で0、図2（対話）で3しかない。一方、東では、青森や秋田の「イグ一」「エグ」³、関東・東北太平洋側の「イグベ一」など、長野・山梨・静岡の「イカズ」など、意志表現形式の地域的まとまりはあるが、沖（2007）の指摘どおり、図1、図2ともにイクカ類が多い。特に関東と東北の「ベ一」使用地域では、「非～か型」にはイクベ類を多く用いるが「～か型」にはイクベカ類よりも動詞終止形によるイクカ類が多用されるという、「非～か型」と「～か型」に用いる語の非対称的な運用が見て取れる。結果的に、「ベ一」は意志の疑問化にはあまり使われないものになっているといえる。

山梨・長野・静岡や、由利～北陸は、東と西の中間的な性格を持つ。イクカ類が多い点では東日本的である。山梨・長野・静岡は、静岡東部と北部伊豆諸島で「ベ一」を使う点では東日本的だが、「非～か型」と「～か型」の両方にバランス良く用いられる点では西日本的といえる。由利～北陸はイコ一類やイコーカ類の割合が多い点で西日本である。

図2は対話場面であるため、「イクワ」や「イクチャ」などの終助詞を伴う回答が多く、由利～北陸から西日本全域で図1よりもイク類の回答が多い。

「イカナキヤイケネー」「イカンバ」「イカンナン」などの義務表現も、各地で回答されている。独り言の図1は、買い物を必要な行動だと捉えれば義務表現が選ばれやすくなる。興味深いのは、「旅行に行く」という任意の行動を伝える図2でも、義務表現の回答が3地点に見られたことだ（大分県中津市「イカニヤナルメー」、鹿児島県南種子町「イカンバヨ」、鹿児島県大島郡天城町（徳之島）[wanja'ikanba dza:wa]）。文脈の捉え方によるものか。

4 意志表現形式の選好

図3は対話場面の128回のうち動詞終止形の使用地域と終助詞に注目したものである。東日本と山陰、九州南部で「～か型」のイクカ類が多い。意志表現を疑問化した「～か」は意志の未決定を表すが、決定に傾いていることを表すこともあり、その場合（6a）の「帰ろうか」と「帰ろう」で意味はほとんど変わらない（仁田 1991 の〈意志の疑問化〉、日本語記述文法研究会 2003: 43）。「か」に「納得」用法があるように、「帰ろうか」には、未決

³ 青森県・秋田県では意志表現に「エグ」、申し出表現に「(迎えに) エグガ?」が用いられると指摘されている（秋田県教育委員会編 2000: 114-115, 880-882）。

図3 『新日本言語地図』128図の動詞終止形+終助詞の分布



定だがその行為をすることに納得しているニュアンスがあるという程度の違いであろう。しかし、(6b) の「スルカ」に対して「スル」は決定段階の表現で、意味が大きく異なる。

- (6) a. さあて、そろそろ {帰ろうか／帰ろう} [日本語記述文法研究会 2003: 43]
b. さあて、そろそろ {帰るか／*帰る} [作例]

イクカ類を選好する地域の多くでは、その「非～か型」に動詞終止形が使いづらい可能性がある。またこのことと「べ」の使用傾向とは影響し合っていると考えられる。

図3では、「非～か型」のイク類の回答が一部の地域にまとまっていることも見て取れる。青森県と九州西部、琉球の八重山列島ではイク類が目立つ。

対話場面では「イクワ」や「イクチャ」などの終助詞を伴う回答が多いことに留意して図3の終助詞「ワ」使用地域を見ると、イクワ・イクバイ類が近畿や北陸、中部、瀬戸内海地域、九州東部にまとまっていることに加え、これらの両端に「イコワイ」「イコワ」(愛媛県、熊本県、鹿児島県)、「イカズワイ」(長野北部)、「イカザー」(静岡東部)が散在することがわかる。富山県ではイクワ類ではなく「イクチャ」が集中的に回答されている。

ここで128図(意志表現・対話)のイコ一類やイコーカ類をピックアップした図4を見る。イコ一類は富山県を除いた由利～北陸地方、岐阜県、愛知県より西の地域に広く使われている。イコーカ類は西日本の広い範囲で独話と対話で区別せずに使えるといえる。

図3と図4を合わせて考える。北陸地方や近畿地方は図3でイクワ類やイクチャ類が集中的に回答されている地域である。図4の石川県、福井県や近畿地方はウ／ヨウによるイコ一類・イコーカ類も対話場面に使えるが、対話において話し手の意向を明示するときは「イクワ」などの動詞終止形+終助詞で表現することを好む地域だといえる。特に富山県では、対話では「イクチャ」⁴を優先してイクワ類は使わず、独り言では使うイコ一類・イコーカ類を対話では使わない傾向がある。独り言か対話かで使用形式が分けられている。

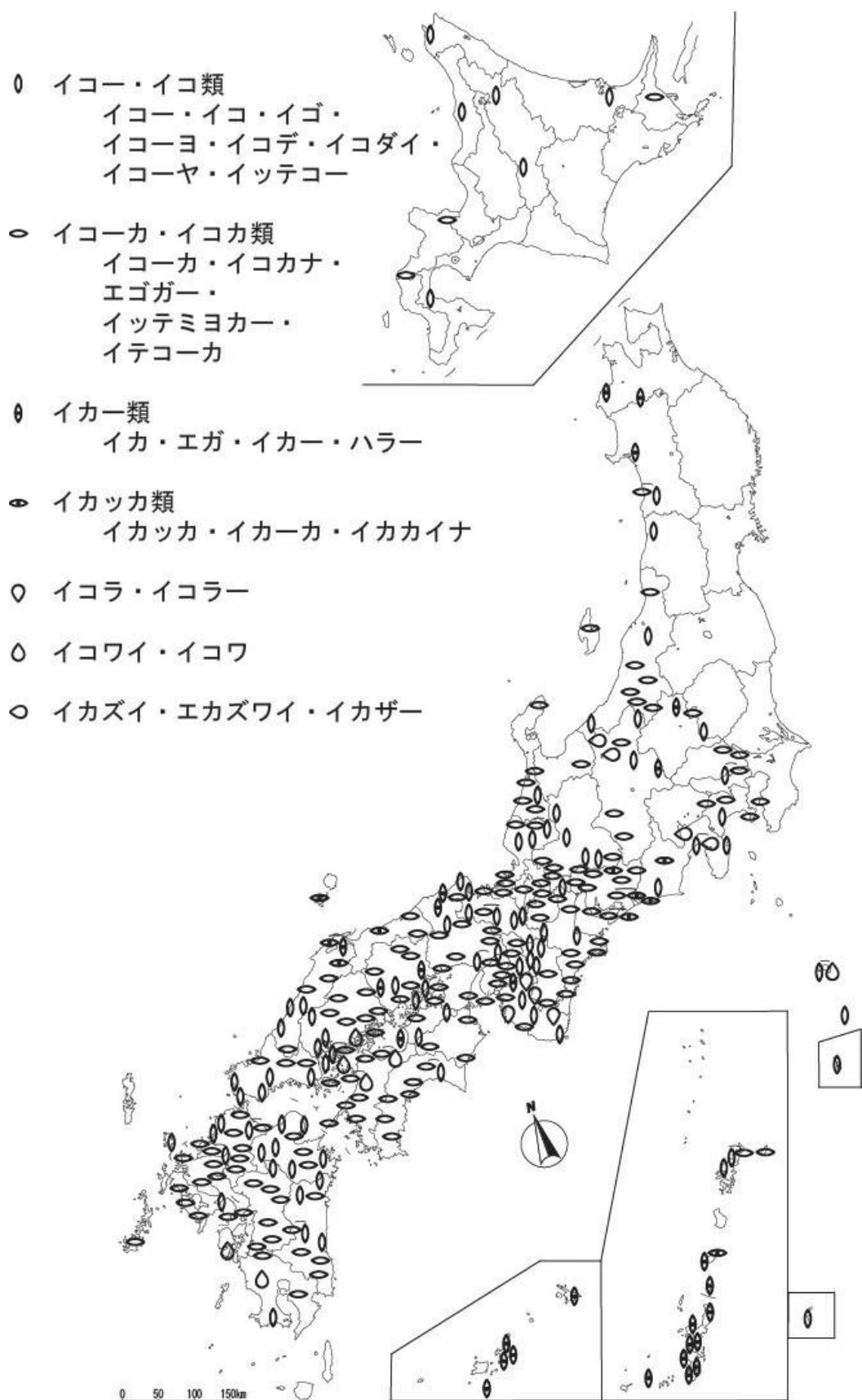
一方で、図3には何も示されていないが図4ではイコ一類やイコーカ類のマークのある地域もある。特に、九州、中国、四国地方は、この文脈でイコ一類・イコーカ類を使うことに抵抗がない地域だといえる。特に、大分県、山口県、広島県西部、島根県西部などでは、ウ／ヨウで「カ」を付けないイコ一類が選択されやすいようだ。

西日本におけるこうしたイクワ類・イクチャ類とイコ一類・イコーカ類の使用傾向の違いは、対話で意志表明をするという文脈において、それぞれの地域でその形式が持つ意味と運用のしかたとが絡まって生じている現象だと考えられる。「イクワ」も「イコ一」も使える地域や場面、スタイルは広いため、こうした選好の違い(運用のちがい)に気づかず

⁴ 小西(2020)は服部(1992)の例と見比べながら、富山では(7)のような意志表現では「ワ」は不自然な場合が多く、「チャ」が優先されるなどを指摘している。特に(7)でお好み焼きをおごる心づもりでいた場合は「ワ」は許容できず、「ワ」が使えるのは「今、その気になった」場合(井上 2006)に限られるという。このような運用は山口の「ワー」にも共通する。対話場面における「ワ」などの終助詞の運用には地域差があることも、今後の分析では踏まえていく必要がある。

- (7) a. それよりおまえの就職祝いだ。お好み焼きおごったるワ。[近畿、服部 1992: (19)]
b. それよかあんたの就職祝いやちゃ。お好み焼きおごったげる{??ワ／チャ}。[富山、小西 2020: (10)]

図4 『新日本言語地図』128図のイコー類・イコーカ類の分布



に使い、ニュアンスが伝わらなかつたり誤解されたりすることも生じている可能性がある。

5 「手伝う？」が申し出表現に使われる条件

申し出表現が意志表現の形式を元にして、話し手の意志を伝えて聞き手に受け入れるかどうかを問いかける表現だと考えると、「手伝う（か）？」が申し出表現だと解釈可能になるためには次のような条件があると考えられる。

〈1〉文脈の支え（動詞の意味する行為に与益性を読み取ることが可能な文脈）

〈2〉話し手の意志表現に動詞終止形+カを選好する

〈3〉非明示の主語（述語動詞の動作主）を話し手だと解釈する

これまで確認したとおり、西日本では意志表現にウ／ヨウ形およびその疑問化形が主に使われ、申し出表現にもウ／ヨウ+カ形が使われやすいといえる。動詞終止形+カは〈2〉が満たされないと〈3〉の解釈は困難になる。

これに対して、東日本・北日本では意志表現に動詞終止形およびその疑問化形が多く用いられる。こうした意志表現の運用傾向がある場合、申し出表現にも動詞終止形+カが使われて〈3〉の解釈がなされているのではないだろうか。意志表現に用いられる「べ」や「ズ」もあるが、これらはあからさまな方言形として、スタイル選択上、冒頭の例文（1）～（3）のような全国共通語を志向する場面では忌避される。こうしたことから、「手伝う（か）？」が申し出表現として使われるようになったのではないだろうか。

【参考文献】

- 秋田県教育委員会編（2000）『秋田のことば』無明舎出版。
井上優（2006）「モダリティ」、小林隆編『シリーズ方言学 2 方言の文法』岩波書店、pp.137-178.
大西拓一郎編（2016）『新日本言語地図—分布図で見渡す方言の世界—』朝倉書店。
沖裕子（2007）「各地方言から見る『方言文法全国地図』 中部（長野・山梨）方言」『日本語学』26-11、明治書院、pp.180-181.
沖裕子（2009）「発想と表現の地域差」『月刊言語』38-4、大修館書店、pp.16-23.
小西いずみ（2020）「終助詞が表す意味とはどのようなものか—終助詞の方言間対照から見えてくること—」『日本語文法』pp.23-39.
小林隆・澤村美幸（2014）『ものの言いかた西東』岩波書店。
日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房。
服部匡（1992）「汎性語の終助詞ワについて」『同志社女子大学学術研究年報』43-4、pp.1-15.
松田美香（2021）「「申し出る」と「受け入れる」—恩恵表現と機能的要素から見る分布の特徴—」小林隆編『全国調査による言語行動の方言学』ひつじ書房、pp.97-115.
森勇太（2014）「申し出表現の歴史的変遷—授受表現の運用史として」金水敏ほか編『歴史語用論の世界 文法化・待遇表現・発話行為』ひつじ書房、pp.247-269.

【付記】

国立国語研究所の全国方言分布調査（FPJD）調査結果の公開データおよび白地図・地図記号ファイルを利用させていただきました。https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/fpjdfpjdfpj_index.html
記して御礼申し上げます。

なお、本発表はJSPS科学研究費20H00015、23K25332の助成を受けた。

《方言関係新刊書目》(118号につづく)

国立国語研究所研究図書室が2024年4月以降に受け入れた図書の中から、2018年以降の刊行物を選びました。なお、同図書室目録に未記載の文献でも、内容を確認したものは掲載しました。

お気づきの点は、日本方言研究会事務局

〒370-1193 群馬県佐波郡玉村町上之手 1395-1 群馬県立女子大学文学部国文学科 気付
hougen-jim@e-mail.jp

までお知らせください。

▼地域別通用度（石川県白山麓地方の慣用語ノート）

元田興喜、元田保榮採録・編集、[元田興喜]、37+314p-30cm. 2019(R01)年10月

▼蒙古語口語語料庫建設及研究

玉榮著、北京：中國社会科学出版社、2+3+215p+挿図-24cm. 2021(R03)年06月

▼音韻・形態統語・意味 (Contribution to the studies of Eurasian languages series 22 [チュルク語文法の諸相 1])

佐藤久美子、児倉徳和編、ユーラシア言語研究コンソーシアム、ix+149p-26cm. 2022(R04)年03月

▼種子島：風と波が育んだ歴史：Tanegashima

九州国立博物館編、九州国立博物館、83p+挿図+地図-30cm. 2022(R04)年12月

▼現代中国における言語政策と言語継承：第7巻

包聯群編著、三元社、323p-21cm. 2023(R05)年01月

▼シモツカレ調査報告書

栃木県教育委員会事務局文化財課編、栃木県教育委員会、139p+図版[2]p-30cm+DVD1枚.
2023(R05)年03月

▼日本江戸時代：唐話的音韻研究

李寧著、广州：暨南大学出版社、3+2+228p+挿図-25cm. 2023(R05)年06月

▼Expressing silence: where language and culture meet in Japanese.

Natsuko Tsujimura, Lanham: Lexington Books, viii+163p.+ill.-23cm. 2023(R05)年08月

▼琉球官話課本考論

范常喜著、北京：中華書局、2+4+250p+図版[2]p+挿図-24cm. 2023(R05)年08月

▼上代日本語の表記ことば（新典社研究叢書368）

根来麻子著、新典社、334p-22cm. 2023(R05)年09月

▼粵語文化地图（廣府文庫：The Canton archives）

郑佩璫著、广州：广东人民出版社、7+2+22+296p+挿図-23cm. 2023(R05)年11月

▼沖縄苗字のヒミツ：増補改訂

武智方寛著、ボーダーインク、222p+挿図-18cm. 2024(R06)年01月

▼常陸國風土記註解（風土記註解シリーズ1）

- 廣岡義隆校註, 和泉書院, 582p+地図-22cm. 2024(R06)年 01 月
- ▼「関係」の呼称の言語学：日中対照研究からのアプローチ（ひつじ研究叢書(言語編)第 202 卷）
薛鳴著, ひつじ書房, xvi+207p+挿図-22cm. 2024(R06)年 02 月
- ▼トウツリオ・デ・マウロの民主的言語教育：イタリアにおける複言語主義の萌芽
西島順子著, くろしお出版, vii+180p-21cm. 2024(R06)年 02 月
- ▼わたしの三河ふるさと辞典：岡崎・山綱ことば
高橋昌也著, 風媒社, 223p-21cm. 2024(R06)年 02 月
- ▼音声・音韻の概念史
阿久津智著, 拓殖大学, ひつじ書房(発売), xx+387p-22cm. 2024(R06)年 02 月
- ▼継承ポルトガル語の世界：地域とつながり異文化間を生きる力を育む
辯野寿美子著, ナカニシヤ出版, vi+191p-22cm. 2024(R06)年 02 月
- ▼生成 AI スキルとしての言語学：誰もが「AI と話す」時代におけるヒトとテクノロジーをつなぐ言葉の入門書
佐野大樹著, かんき出版, 349p+挿図-19cm. 2024(R06)年 02 月
- ▼日本手話の歴史的研究：系統関係にある台湾手話、韓国手話の数詞、親族表現との比較から
相良啓子著, ひつじ書房, vi+357p+挿図-22cm. 2024(R06)年 02 月
- ▼福島県浜通りの昔ばなし
杉本妙子編, 茨城大学人文社会科学部杉本妙子研究室, 107p+挿図-21cm+CD1 枚.
2024(R06)年 02 月
- ▼文献アクセント史論考
上野和昭著, 武蔵野書院, x+281+5p-22cm. 2024(R06)年 02 月
- ▼Space-time (dis)continuities in the linguistic landscape: studies in the symbolic (re-)appropriation of public space.
Edited by Isabelle Buchstaller, Małgorzata Fabiszak and Melody Ann Ross, New York, NY : Routledge, xvi+355p.+ill.-24cm. 2024(R06)年 03 月
- ▼「音」と「声」の社会史：見えない音と社会のつながりを観る
坂田謙司著, 法律文化社, xi+289+5p-21cm. 2024(R06)年 03 月
- ▼「多文化共生」言説を問い合わせ直す：日系ブラジル人第二世代・支援の功罪・主体的な社会編
入山本直子著, 明石書店, 269p+挿図-22cm. 2024(R06)年 03 月
- ▼アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究 13：アイヌ・先住民言語アーカイブプロジェクト報告書
佐藤知己編集, 北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 96p-30cm. 2024(R06)年 03 月
- ▼音盤を通してみる声の近代：日本、上海、朝鮮、台湾
劉麟玉, 福岡正太編著;細川周平[ほか]著, スタイルノート, 271p+挿図-21cm. 2024(R06)年 03 月
- ▼カラチャイ語エスキシェヒル方言調査報告書
菅沼健太郎, オカン・ハルク・アクバイ著, 金沢大学人間社会研究域, viii+176p+挿図-26cm.

2024 (R06) 年 03 月

▼関西華僑の生活史

神阪京華僑口述記録研究会編, 松籟社, 250p-21cm.

2024 (R06) 年 03 月

▼危機的な状況にある言語・方言サミット(与那国島大会)報告書:令和5年度

文化庁国語課, 沖縄県文化観光スポーツ部文化振興課しまくどうば普及推進室, 与那国町教育委員会, 214p+挿図-30cm.

2024 (R06) 年 03 月

▼北太平洋の先住民文化:歴史・言語・社会

岸上伸啓編, 臨川書店, 284p+挿図+地図-22cm.

2024 (R06) 年 03 月

▼言語、文化の狭間(あいだ)で:歴史における翻訳

平田雅博, 原聖, 割田聖史編, 三元社, xii+284p+挿図-21cm.

2024 (R06) 年 03 月

▼言語教育のマルチダイナミクス:多様な学びの方向性

田中富士美, 柿原武史, 野沢恵美子編; 飯野公一[ほか執筆], 明石書店, 312p-21cm.

2024 (R06) 年 03 月

▼現代民俗学入門:身近な風習の秘密を解き明かす

島村恭則編, 創元社, 151p+挿図-21cm.

2024 (R06) 年 03 月

▼行動地理学研究

若林芳樹著, 古今書院, iv+317p+図版[1]枚+挿図+地図-22cm.

2024 (R06) 年 03 月

▼声と文字の人類学(NHKブックス 1284)

出口顯著, NHK出版, 258p+挿図-19cm.

2024 (R06) 年 03 月

▼ことば探偵金田一京助の秘密

郷原宏著, 双葉社, 317p-19cm.

2024 (R06) 年 03 月

▼砂川の民俗(新編立川市史:資料編)

立川市史編さん民俗・地誌部会編集, 立川市, xii+508+41p+図版[8]p+挿図+肖像+地図-27cm.

2024 (R06) 年 03 月

▼諏訪の市民科学と天文・諏訪の地理、信州の地理と市民科学:「市民科学」プロジェクト 2023 年

度講演会・シンポジウム集録

大西拓一郎編, 「市民科学」プロジェクト, iii+146p+挿図-30cm.

2024 (R06) 年 03 月

▼全国方言文法辞典資料集 8:活用体系 6(科学研究費補助金(基盤研究 A)研究成果報告)

方言文法研究会編, [方言文法研究会], 113p+地図-30cm.

2024 (R06) 年 03 月

▼ソロンの文化と生活 5(ツングース言語文化論集 73)

風間伸次郎, バイカル編訳, 東京外国語大学, iv+301p+挿図+肖像-26cm.

2024 (R06) 年 03 月

▼忠生地区:木曾・根岸/上小山田/下小山田/山崎/図師(町田の地名)

「町田の地名」編集委員会編, 町田地方史研究会, 小島資料館(販売), 78p+挿図+地図-30cm.

2024 (R06) 年 03 月

▼多文化共生のコミュニケーション(放送大学教材)

大橋理枝, 根橋玲子編著, 放送大学教育振興会, 284p+挿図-21cm.

2024 (R06) 年 03 月

- ▼地域歴史文化のまもりかた：災害時の救済方法とその考え方
天野真志, 松下正和編; 日高真吾[ほか執筆], 文学通信, 294p-21cm. 2024(R06)年 03 月
- ▼地理・地誌・地理学の論理構造
田邊裕著, 古今書院, xvii+382p+挿図+地図-22cm. 2024(R06)年 03 月
- ▼東北本線・常磐線グロットグラム
本多真史編著, 奥羽大学本多真史研究室, 150p-21x30cm. 2024(R06)年 03 月
- ▼徳之島上国日記集（「令和版伊仙町誌」資料集 2）
伊仙町誌編纂室編, 伊仙町, 531p+挿図+地図-30cm. 2024(R06)年 03 月
- ▼奈良県言語地図
入船真由, 前田真友希, 宮川直也編集, 奈良大学文学部国文学科国語学研究室, 奈良大学方言サークル, v+141p+地図-30cm. 2024(R06)年 03 月
- ▼平賀エテノア(語り)・久保寺逸彦(採録)によるアイヌ英雄叙事詩「Kutune sirka (虎杖丸の曲)」
テキスト : JSPS 科研費 20K00534 報告書
遠藤志保編集, 北海道博物館, 418p-30cm. 2024(R06)年 03 月
- ▼フィールドワークという探索活動の可能性 2
葉山茂編, [弘前大学人文社会学部 : 弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター], 129p+挿図-26cm. 2024(R06)年 03 月
- ▼福岡言語学会 50 周年記念論文集
武内梓朗[ほか]編, 開拓社, x+533p+挿図-21cm. 2024(R06)年 03 月
- ▼文化地理学 : 環境, 景観, アイデンティティ, 不平等
ウイリアム・ノートン, マーガレット・ウォルトン=ロバーツ著; 山本正三[ほか]訳, 二宮書店, xi+547p+挿図-21cm. 2024(R06)年 03 月
- ▼昔話の会・方言かるたによる地域方言意識の向上プロジェクト : 令和 5(2023)年度文化庁委託事業報告書
杉本妙子編著, [茨城大学人文社会科学部], DVD-R1 枚-12cm. 2024(R06)年 03 月
- ▼The Cambridge handbook of gesture studies.
Edited by Alan Cienki, Cambridge: Cambridge University Press, xviii+690p. +ill. -25cm. 2024(R06)年 04 月
- ▼音声・テキスト・画像のデータサイエンス入門
市川治, 飯山将晃, 南條浩輝共著, 学術図書出版社, vii+179p+挿図-26cm. 2024(R06)年 04 月
- ▼音声言語処理入門 : 図解・音声・動画でわかる
高良富夫著, 研究社, xii+267p-21cm. 2024(R06)年 04 月
- ▼地名と地形から謎解き : 紫式部と武将たちの「京都」(知恵の森文庫[t や 5-6])
八幡和郎著, 光文社, 262p+挿図+地図-16cm. 2024(R06)年 04 月
- ▼Basic Okinawan: from conversation to grammar.
Rumiko Shinzato and Shoichi Iwasaki, Honolulu: University of Hawai'i Press, xxxv+335p. +

- ill. (somecol.)+maps-26cm. 2024 (R06) 年 05 月
- ▼美し、をかし、和名由来の江戸魚図鑑
田島一彦企画アートディレクション, 中江雅典監修, パイインターナショナル, 210p+挿図-18×26cm.
2024 (R06) 年 05 月
- ▼日下を、なぜクサカと読むのか：地名と古代語
筒井功著, 河出書房新社, 236p+挿図-20cm. 2024 (R06) 年 05 月
- ▼言語学はいかにして自然科学たりうるか：今井邦彦言語学講義
今井邦彦著, 大修館書店, vi+240p-21cm. 2024 (R06) 年 05 月
- ▼このとおりやればすぐできる社会調査のための統計学：生きた実例で理解する（改訂新版）（現場の統計学：基礎からやさしくわかる）
神林博史, 三輪哲著, 技術評論社, 289p+挿図-21cm. 2024 (R06) 年 05 月
- ▼新言語学試論（叢書記号学的実践 38）
ルイ・イエルムスレウ著, 平田公威訳, 水声社, 262p+挿図-22cm. 2024 (R06) 年 05 月
- ▼日本語変異論の現在（ひつじ研究叢書（言語編）第 198 卷）
大木一夫, 甲田直美編, ひつじ書房, xi+601p+挿図+地図-22cm. 2024 (R06) 年 05 月
- ▼播磨国風土記：全訳注（講談社学術文庫 2817）
秋本吉徳[訳注]; 鉄野昌弘補, 講談社, 354p+地図-15cm. 2024 (R06) 年 05 月
- ▼Descriptive grammar and diachrony of Kurima: a minority south Ryukyuan language of the Miyako Islands. (Languages of Asia series: v. 29)
By Aleksandra Jarosz, Leiden : Brill, xxiv+729p. +ill. (somecol.)+maps-25cm.
2024 (R06) 年 06 月
- ▼アイヌがまなざす：痛みの声を聴くとき
石原真衣, 村上靖彦著, 岩波書店, vi+365p+挿図-20cm. 2024 (R06) 年 06 月
- ▼インタラクションと対話：多角的な視点からの研究方法を探る
谷村緑, 仲本康一郎, 吉田悦子編, 開拓社, xv+196p+挿図-21cm. 2024 (R06) 年 06 月
- ▼広東語の世界：香港、華南が育んだグローバル中国語（中公新書 2808）
飯田真紀著, 中央公論新社, v+245p+挿図+肖像+地図-18cm. 2024 (R06) 年 06 月
- ▼近現代日本語における外来語の二層の受容（ひつじ研究叢書（言語編）第 206 卷）
石暘暘著, ひつじ書房, xvi+278p+挿図-22cm. 2024 (R06) 年 06 月
- ▼近世長崎渡来人文運史：言語接触と文化交流の諸相
若木太一著, 勉誠社, 6+695p+挿図-22cm. 2024 (R06) 年 06 月
- ▼自然言語処理の教科書
小町守著, 技術評論社, x+237p+挿図-21cm. 2024 (R06) 年 06 月
- ▼ことばが変われば社会が変わる（ちくまプリマー新書 463）
中村桃子著, 筑摩書房, 222p-18cm. 2024 (R06) 年 07 月
- ▼東方台灣語辞典：第 2 版

- 村上嘉英編著, 東方書店, xxvi+543p+挿図-20cm. 2024(R06)年 07 月
- ▼The Victorians and English dialect : philology, fiction, and folklore.
Matthew Townend, New York, NY : Oxford University Press, 328p. -24cm. 2024(R06)年 08 月
- ▼おもしろい方言地名と名字のあれこれ
高田哲郎著, 埼玉新聞社, 291p-19cm. 2024(R06)年 09 月

(担当 : 山岡華菜子)

— お 知 ら せ —

〈次回のお知らせ〉

次回の第 120 回の研究発表会は、**2025 年 5 月 9 日（金）**（日本語学会春季大会前日）に名古屋大学にて現地開催の予定です。

〈発表募集〉

1. 応募資格・条件：方言研究に関心をお持ちの方なら、どなたでも応募することができます。研究発表は、日本語方言とその関連領域に関する未発表のものとし、1題につき発表 30 分、質疑 20 分（予定）です。
2. 応募締切：**2025 年 1 月 31 日（金）** 必着
3. 応募書類：次の 2 点（A4 判用紙計 2 枚）をご提出ください。
 - a. 申込書：A4 判用紙 1 枚に、発表題目・氏名・所属・研究略歴・連絡先（住所、電話番号、メールアドレス）を記載してください。
 - b. 発表要旨：冒頭に発表題目を記した上で、研究の目的・方法・結論を具体的に明記してください。氏名・所属は記載せず、本文においても応募者が特定できるような表現を避けてください。分量は、図表等込みで A4 判用紙 1 枚以内です。
4. 応募先と応募方法：下記連絡先①（研究発表会委員会）宛に、メールの添付ファイル（Microsoft Word もしくは PDF）でお送りください。その場合、特殊な記号を使うなど、文字化けが予想される場合には、プリントアウトしたものを持ち込んだりスキャンした形で PDF ファイルをお送りください。
5. 応募可能数：筆頭発表者として応募できるのは 1 件です。応募書類の提出者を筆頭発表者として扱います。
6. その他：研究発表会委員会で審査の上、採否を決定します。採用決定後、発表題目、発表者名（連名発表の場合、氏名の順序も）は変更できません。採用された方には、**2025 年 4 月 7 日（月）**までに発表原稿集の原稿を提出していただきます。その他、詳細はホームページをご覧ください。

連絡先①

研究発表会委員会（委員長：大橋純一）
〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町 1-1
秋田大学教育文化学部
地域文化学科気付
hougen-happyou@e-mail.jp

連絡先②

事務局（総務委員長：新井小枝子）
〒370-1193 群馬県佐波郡玉村町上之手 1395-1
群馬県立女子大学文学部
国文学科気付
hougen-jim@e-mail.jp

Conference Papers of the Dialectological Circle of Japan

No. 119 (November 2, 2024), Online

Presentation

1. CHEN Xi: The accentuation of compound words in the dialects of Kumamoto City and surrounding areas
2. MATSUMOTO Kazuko, OKUMURA Akiko and MATSUDA Kenjiro: The formation of a multiethnolect in the Greater Tokyo Area: Ethnic variation in Japanese spoken by South American migrants
3. OCHIAI Izumi: The relationship between “sty” and “visiting god” in Japanese dialects
4. ENOMOTO Naoki: *Osu* and *oshi* ‘to push’ used to express threshing: From descriptions in local government histories in the Tohoku and Kanto regions
5. IKEGAMI Wataru: Dialect (Yamanaka dialect) and the Classical Essay *The Pillow Book*
6. FUNAKI Reiko: Regional Differences in Preferences for Expressing Intentions: Why is *Tetsudau*? used to signify “May I help you?”?